

第拾四號

文明之母第拾四號目次

本誌は毎月二回(三日十八日)に發行す

本誌は前金に非れば發送せず

本誌の定價は一冊金六錢十二冊半年分金六十八錢廿四冊壹年分金一圓卅錢

全國無逓送料

本誌の廣告料は(六號活字廿四字詰)

壹行　金八錢

三十行(半頁)以上(壹回)金七錢　(二回以上)金七錢

六十行(壹頁)以上(四回)金六錢　金六錢　金五錢

本誌の見本は郵券六錢を送らるれば呈す

本誌の代金御回送の節は内國通運早達便又は東京郵便局へ御振込被下度

郵券代用は一割増

本誌の前金將に相切れんとする時は其巻の宿所姓名を朱書して之を送るべし

版權所有

主筆　大矢森之助

發行兼編輯人　中村一　東京深川區猿江町十三番地

印刷人　小西石造　東京深川區仲町八番地

發行所　東京日本橋區大傳馬町二丁目貳拾貳番地　生文社



文明之母第十四號



明治二十二年十一月十八日發兌

○婦女子一般の徳義を論じて婚姻に及ぶ(承前)

關場不二彦稿

夫と婦とは真正の人間たらんと欲する禮義上固有の義務を有し、隨ツて性理上及び精神上にも幸福の婚嫁を完了する人間とならんため、各々差異を生ぜしを見るなり。夫には動作的の性あり、婦には因襲的(受動的)なる性あり。男子は獨立、勢力、鋭敏なる考察を有すれども、女子は服從、柔和の感覺を有せり。而して身体に於いても亦其の特殊なるを見るなり。乃ち男子の身体は堅固にして骨立し、大にして強、其の皮膚、軟骨、筋腱は固くして、其の筋肉は強大、其の骨は稜々たり、故に顔面は區畫分明にして凸凹をなし、之を頭に比すれば大にして、殊に鼻目共に著し、其の肩は廣くして強く、胸亦廣くして長し。女子の肢節は圓滿にして、柔弱なる外容を顯はし、下肢は胴に比して男子よりも短し。男子に在りては其の体肉に於いても固形分多くして、血液は纖維素に富み、多量の鐵と塩分

と含み、其の流る、や徐々たりと雖、強烈なる波動を送り、動脈性の血液多し、其の呼吸は肺、喉頭および氣管の大なるが爲に強し。女子にありては消化も淋巴および血液の製造も共に迅速に成り、而して女子の生命は其の輕き骨骸にも似ず、其の身体の纖小にも似ず、其の神經の過敏にも關せず、一般に持久性なり。男子にありては考察、希望(情)および動作ともに盛なれども、婦女子は植物的及感觸的の性を以て主とす。男子の前頭後頭は能く發達し、其頭は平常廣くして圓く、額亦廣くして高く、其大サも其の量も共に大なり、其の精神は獨立し、自由にして大膽なり實物的の世界と理想的の富限(真正、自由、及權限)を獲んことを勉むれども、女子は家に在りて支配し、其の行爲は重に感覺より促がさる、而して術藝、宗教、及家族は其の作爲の主眼なり。男子は鋭敏にして特行し、常に自ら見、之を探り之を試み、之を行えんと欲す、女子は感覺激にして、受動的なり、物質的并に理想的の世界に於いて、製造作爲を好まず、主權とする所僅少にして、風儀習慣は之を守ることを勤む。男子の性質は堅固にして實力あり、直率にして正道を愛し、己の力を計量して、事を改良するの精神あり、女子は之に反して柔和にして一定の思量なく、怯懦にして狡猾、諂媚、且扮飾を愛して保守の精神あり。男子の着眼は世界なり、女子の着眼は一家なり。女子は人間の心臟にして、男子は此の心臟の主人なり。男子の特立、女子

の自然的、男子の實力、女子の美麗、等相對立し、男子は外方に考へ内方に感じ、女子は外方に感じ内方へ考ふ。(プユル子氏)男子は人の考ふる所を視、女子は人の言ふ所を見る。(ヒツペル氏)男子は自然に服從し、女子は男子を支配し、男子は力を要し、女子は伎倆を要す。(カント氏)男子は一情欲を出だし、女子は衆情欲に追ふも、男子は意氣を愛し、女子は外貌を喜ぶ、男子は物質を嗜む、縱令へば直正、財産、地所等のごとし、女子は寧ろ人物を好む。(ジエアン、パウル氏)

此の兩性の差異は生殖の作用に際し自ら分業を生じ、男子は生産的にして、女子は受胎的なり。然れども共に同じく須要の事項たれば、兩性の同權實に是に因するなり。抑婚姻の目的は、兩性平均にあらずして、乃ち兩性の相反せる者を平均して單純となすにあり。故に人間の本体に從へば、婚姻は精神身体的の婚姻なり。

婚姻に就ては諸哲學者の説多し。然れども彼の自然化成的の無羞派(Naturalistischer cgnismus.)の如きは、單に性欲を性理上に滿足するを以て婚姻の主義となすに到ッては、謬れるものといふべく、又彼の精神化成的の嚴格派(Spiritualistircher rigorimus)の如きは婚姻を以て不潔となせは、同じく謬見に過ぎざるなり。無羞派世に擴がりて自由の慕愛および自由の肉交等の迷信を來し、並に婦女共同の醜行を見るに至り、嚴格派

世に出で、無婚內戒(耶蘇旧教等)および割勢等の事實を來たせり。苟も生殖的の觀を破りて、彼の淫風に飄揚せしむるの學派ハ論ずるに足らずと雖も、如何せん、世猶彼の扮飾淫装(觀劇等に際して婦人の扮飾する等)或ハ正婚を破滅するの温柔心慾を斷絶せざるを。又彼の蓄妾、淫賣、娼妓、自淫等の無戀的の淫事あるを。又如何せん、外容のみ神聖なる虛飾行それ、或ハ同性相亂る、の事實あるを。

然れども此等の誤謬ハ正當の婚嫁に據ツて其の勢を逞うするを得ざるなり。正當の婚嫁とハ勿論性慾を以て性理的となすと雖も、德義上の性交(婚姻)を以て其の行を神聖にし、終始智識の下に服從するものなり。婚姻の性理的目的ハ人性の生殖と保持とにあり。斯くいへハ一ニ動物ニ異ならずと雖も、人間ニ在りてハ小兒を生産するのミならず、之を教育せざるべからず。之に就きてハ時間、方法および雙親が平生の連合を要するなり。之ニ據ツて之を見れば、婚姻ハ異性の二人法律的神聖なる愛慕および生計の共有ニ相進むの行動をいふ、之ニよりて前の嚴格派も無羞派も共に誤れることを知るニ足らんのみ。

權利上(然れども德義上にハ非ず)婚姻ハ一條約にして、夫婦ハ共同に生活して兒童を生産し、一家族の保續と一家を形成するの義務あるなり。各人みな此の務義あるを以

く、婚姻をなすことの權利は、政府も宗教も之を禁止するを得ざるなり。固より其の適當の年限に達せる者たるに限るべきなり。

權利上のみならず、徳義上許しつゝあるは一夫一婦なり。如何んとなれば數多の母或は父は、一家を形成せずして數家を形成すべければなり。多婦に於いては小兒は數多の母を有し、私生に於いては小兒は父を有せず、共に教育上に就き問題となるものとす。故に徳義上一夫一婦を以て正當となすなり。權利上許可せられたる蓄妾は、時として徳義上とも見做すべきなり、然るときは婦は奴隷のみ。

小兒を生産することは徳義上より觀察すれば、決して婚姻の目的にあらずして其の幸福なる恵賜なり。如何んとなれば小兒を生産せざるも婚姻は成立つものなればなり。而して其の目的は單に徳義的の愛慕を滿たすに止まれるなり。故に徳義の愛慕は精神道徳の服從を表し、其の性交に前驅す。而して此の性交にして徳義的の愛慕なくんば、之を自然に反する行實と謂ふのみ、之を自らを辱かしむると謂ふのみ。行娼は自ら辱かしむるの最下等なるものにして、天然生活の華、天然秘密の神聖なる獸行是れなり。

徳義的の婚姻は二個の身体的、精神的成熟せるもの、自由の愛慕より互に相擇び、智

識を以て婚姻的およぴ社會上の義務を盡すため、永續する生計の共同に進むよりして成るものにして、之れに據りて彼の會社的の婚嫁も小說的の輕噪婚姻も判斷し得るなり。

所謂る會社的の婚姻 Conventions-ehe とは階級上、金錢上より成るものにして、一に彼の年齡或は教育の差異如何んといふごとき、德義的の愛慕を問はずして、單に其の身体を委任するといふ如き不德の婚なりとす。之れと同じく小兒の許嫁、或は精神身体不成熟なるもの、婚姻、若しくは壓制的に、或は自由的に、盛年の處女と廢物の老人と婚姻するは德義上不正とす。

所謂る傾向的婚姻 Inklinations-ehe とは一時の情慾、或は感情的の誤愛より生ずるものなり。

凡て幸福なる婚姻には、情愛の實に欲くべからざるものたるは疑なし。故に斯くの如き小說的の傾心は、唯單に情鋼の美麗にのミ由ツて行はる、婚姻多くして、彼の最も主要なる教育宗教および思想等に由りて定めらる、婚姻は稀なり。之を誤愛といふは、單に外容の美に傾動して愛慕するなるを以てなり。其の久しく相持する能はざるは論を俟たず。實に外貌の美に賴りて婚姻するは、薔薇花あるを以て其の土地を購ふ

に興ならず。

ソロモン王は云はく、愛すべく美なるは婦といふに足らず、天帝を恐るゝものは真の婦なりと。容貌の美は實に恃むに足らざるなり。また婚嫁は社會上種々の事物に由りて、其の愛情を減殺するに足らざるなり。嗚呼若し婚姻は彼の窮乏餬口の貧、負債等に責むるなくんば、實に幸福を極むるものといふべきなり。然して婚姻は一家族を形成するものたれば徳義上先兩親の許容を求むべきものとす。然る後政府は結婚に就き非常の興味を有するなり。政府は血族或は姻族の婚を禁じ、蓄妾を許さゞるべく(西洋)又兩婦をも禁じ、男色を許さず。政府は夫婦は終身相伴ふなるべきを要求し、隨ツて民法的の婚を望むなり。

夫妻の徳義は至難の經驗となすべし。如何んとなれば婚姻は愛慕と幸福の墳墓にあらずして、衆多の徳義を開發せざるべからざるを以てなり。耐忍、節制、正直、廉潔、親睦威權、實力等殊に誠信は夫妻の共に顯はすべきものにして、心の真率と敢て乾枯せざる美花は、優なる羞かしの性と匹偶す(シルレル氏)而して情慾は銷滅して情愛は止まるべし(シルレル氏)父は一家の開基者として、衣食住の注意を與へ、安全と名譽を基づくべし。母は利益を保持し、之を注意し、父母與に小兒を教育し、父は家の長となり、母は

其の副となるなり。蓋し婦は夫の爲に安全と名譽とを保ち得るを以てなり。其の同權は益々其の義德と共に顯るべし。カント氏は夫婦の關係を以て王と大臣とに比較せり、王は管理し大臣は支配する是となり。ルーテル、チンツエンドルフ、トツキヴイル、シルレル、ブルケ、ギゾーの諸學士は世上一家の幸福より他に幸福の優れるものなしとせり。

（完）



次號乃ち第十五號、若しくは第十六號より、Dr. Price's Cook Book. の第九版を飜譯して掲ぐべし。

"We may live without poetry, music or art;
We may live without conscience, and live without heart;
We may live without friends, we may live without books;
But civlized man cannot live without cooks."

○育兒衛生法

營養（三）

關場不二彦稿

牛乳用法。

第一。牛乳は其の牛の飼養如何によりて、或は人体に害を與ふべき成分を有することあれば、先ヅ其の試驗を行ふべし。況シや腐敗せる牛乳、或は預め水を加入せしもの等は勿論之を遠ざくべし。驗乳器を用ひ、又は牛乳の脂肪含量をも驗するを可とす。其の他僞製の牛乳（白堊或は麥粉にて）にも注意すべし。

此の事は先ヅ當局者、或は醫師に乞ふて後其の用不用を定むべし。

眞正の牛乳は（新鮮なるもの）白色若くは帶黄白色（然れども母乳よりは其の色蒼白）なり。又母乳よりは少しく不透明にして、著しく固有の香臭を有し、其の性或は酸、或は亞爾加里、或は中和なり。而して母乳よりは濃厚なるを常とす、其の味は母乳よりも甘味少なし。此等の性質を具ふるは善良なる者なり。其の色稀薄にして、其の味酸甘相半ばし、其の臭尋常ならざるは決して用ふべからず。

第二。牛乳は適當に稀釋して(後條)後之を煖たむべし、獨り之を煖たむるのみならず一度之を沸煮すべし。斯くして有害物はみな遠ざかるべし。此の沸煮したる熱汁は直ちに吸はしむべからず、一旦之を冷却せしめて用ゆべし、氷水の如く冷却して用ゆるは醫治上に之れ有り、又微温なるもよし。

元来乳汁は時を經れば乳酸を生じ、乾酪素を沈澱し、遂に醱酵すること有り、是れ微なる有機黴菌の作用なり。之を避くるには牛乳は新鮮なるものなるべく、之を容る、器物も清潔なるべく、殊に炎暑の節には宜しく之に注意すべし。沸煮は第一に其の醱酵を制止するものなり、沸煮の際極めて少量の重炭酸曹達(千分ノ一)を加ふるを好しとす。又水楊酸は(千分ノ五)乳汁の醱酵(腐敗の一種なり)を止むるものなり。

第三。牛乳を稀薄することは用法に於いて第一の要務なり、而して此を稀釋せる水は一旦沸騰せしものを要す。其の割合は固より初生兒の月日を經過せしものと、否とに於いて其の比例を異にす。乃ち、

第一期(第一ヶ月より第三ヶ月まで)に於ていは、

一分の牛乳に　三分の水を混和す。(水三倍)

第二期(第四ヶ月より第六ヶ月まで)に於いては、

一分の牛乳に　二分の水を混和す。(水二倍)

第三期(第七ヶ月より第九ヶ月まで)に於いては、

一分の牛乳に　一分の水を混和す。(等分)

第十ヶ月に於いては

二分の牛乳に　一分の水を混和す。

或は水を混和するを要せず。

右其の稀釋の比例にしく、稀釋の後之を沸煮するを肝要とす。(前條)

第四。牛乳は稀釋したる後砂糖を混和すべし。其の比例は一合(百八十瓦)に就き二茶匙(咖啡匕)の砂糖なり乃ち十瓦許りなり或は一茶匙にても宜し。甘味を附するは初生兒の望む所あるを以てなり。

今茲に第三期(七ヶ月乃至九ヶ月の)乳兒あり、之に與ふべき牛乳は左の如く調和す。

牛乳　五合五勺

水　五合五勺

白糖　六茶匙（三十瓦乃至十茶匙）
重炭酸曹達　一刀尖（一瓦半乃至二瓦許）
食塩　少許

用法に就きては大略此の如し。

牛乳と母乳飲用の結果は大同小異なれども、母乳は固より優等なるは論を俟たざる事實なり。然り而して前陳せるごとく母乳を欠くの際は、牛乳を代用すること是れ已むを得ざるものなり。若しまた母乳唯々其の量の乏しきのみにて、全く出でざるにあらざるときは、半ば母乳と牛乳とを用ゆるも可なり。此の時牛乳は勿論稀釋すること前のごとくなるべきものとす。小兒の成長は全く此の營養に關係するものにして、其の体量も其の体長も、母乳牛乳の營養により差異を見るなり。小にしては其の一個人の身体なれども、大にしては國民兵務上などにも相關することなり。ルーソー氏は四千一百人の小兒に就き、母乳、牛乳および兩乳共用者の体重、体長を調査せり。其の表に據れば、

乳	年齢	体重（瓩）	体長（仙迷）

母乳	全一年	七、九一〇	六九
母乳及牛乳	全一年	六、八一二	六三
牛乳	全一年	六、八二八	六三
母乳	第四年	一四、二〇〇	九三
母乳及牛乳	第四年	一二、〇〇〇	八七
母乳	第八年	二〇、七〇〇	一一六
牛乳	第八年	一八、三〇〇	一一三

右の表に據るに、第八年までは体量は我が六百四十匁の差異、又体長は大凡一寸許の長短を生ぜるものあり。此等の事は全く之を母乳牛乳の成分に歸せるを得べし。母乳の蛋白質は牛乳よりも少許なれども、之を比ぶるに甚だ吸収せられ易く、乃ち体の組織を作り易く、また無機塩類中にも石灰分、并に燐酸亞爾加里は主として骨骼を作るに用ゐらるゝにより、自然生長發達することは疑を容れず。又學理上にて含窒素物と無窒素物との比例、乃ち養分比例は母乳にありては十と三十七なれども、牛乳にありては十と三十なり、（人間の養分比例は十と四十五、乃至三十五を以て適切なるものなりと

ず)。之に據ツて之を見るに、牛乳の劣れることは明瞭なれど、亦之を用ゆるに當り調和せざるべからざること明らかなり。

牛乳は素と其の飼養に依りて、其の成分を變更す。例之バ大根、木の芽等を多食する牛は揮發分に富む、乳液を生じ、小兒の胃中に入りては其の腸胃加答兒を發すべし。又嫩葉綠芽を多食して生じたる乳液を飲用するときは、小兒は乳液を嘔吐し或は青色の便を出だすべし。乳牛に尤も宜しきは乾燥したる芻なり、其の乳液は保健食料たることと疑なし。



○雨中紅葉　千家尊福

時雨には、色もひかりも、あらましや、ふれば紅葉の、てりまさるらん。

○落葉　山本尹之

さよしぐれ、降やきぬると、窓の戸を、あくるたもとゝ、木の葉ちる也。

○鈴虫　町原熈麿

世をすてゝ、心をゝしき、秋の夜に、ふりいでゝ、啼く、むしのこゑかな。

○轡虫　仝

くつわむし、野路の清水ゝ、駒とめて、ゆるす手綱の、したに鳴くなり。

○近詠五首　佐々木信綱

秋夕　狩人の、たもとの上も、たゞならじ、うづらなく野の、秋の夕ぐれ。

紅葉　もずのなく、所となりし、我門の、はじの立枝ゝ、もみぢしてけり。

秋山　お鹿なく、信楽山を　こえくれば、まきのひまより、紅葉ちるなり。

眺望　さぎのゐる、堤の柳、かげ見えて、雨にくれゆく、かそをちのさと。

陳思　父母の、深きめぐみゝ、むくひんと、淺き心の、まとそるゝかな。

○くさ〴〵の歌

荻露滋　白露ゝ、むすびながらに、糸荻の、花こそぬれて、ほころびゝくれ。　西升子

名所月　さえ〴〵て、照しく影の、白々れば、くらぶの山ゝ、名のみなり鳬。　中島文子

山路霧　秋霧の、立かくしたる、山路かな、わけ行く人の、こゑばかりして。　鍋嶋榮子

海邊月　打渡せ、大井品川、さやかにて、ゆふづき清し、たけしばのうら。　亀井八重子

庭前虫　てに入りて、又おきぬべく、思ふかな、はなちし庭の松虫がこゑ。　田邊龍子

刈萱　秋くれば、風のやとりに、成にけり、人なき宿の、ふはのかるかや。　冨田愛子

秋井　手をむてゝ、夏は結びし、水の音も、身ふしみわたる、かとの小井。　金子鋋子

水上月　角田川、中すの蘆を、こぎくれば、ふみのあやせに、月ぞたゞよふ。　橘糸重子

雨後萩　村雨の、なごりの露に、色そひて、咲きまさりけり、あきはぎの花。　鳥尾廣子

鹿　さらぬだに、物のかなしき、夕まぐれ、鹿の音さそふ、あきの山風。　又原庫子

擣衣　さやかなる、月の桂の、里人は、ふくるもしらで、ころも打つらん。　辻靜子

〇暮秋虫といふ事を　竹屋雅子

千ぐさにすだきし虫、遠方の鹿、枕上にひゞきし砧の音も、はや絶々になりもてゆきて、靜けさいはん方なし。ねよとの鐘におどろきて、閨に入れども、更にいねられねば、燈火かゝげて、いにしへ物語をとうでゝ、見居たるをりしも、はら〳〵と窓に音するは、時雨ふやと、やをら起出で、見いだせば、雲間より山のはつかふ月もれて、身にしみたる風

ふ、紅葉のちりそむるなりけり。

さびしとは、秋はゆふべを、いかでいふ、夜半こそいとゞ、靜けかりけり。

○秋之夜涎漫筆（五）

鈍涎風流士

亂世婦人の狀況

獨乙のハインリツヒ、バイツケ氏著獨乙自由戰記に據る

頃は一千八百十三年彌生の春なりけり、名聲遍く勃那巴家の一男兒は、強暴の羽翮にて風塵と空捲く勢に、隣國の獨逸聯邦は皆壓服せられしがあはれなる。獨り普魯西のみ、恰も螳螂が斧を揮して車の轅に打ち向ふ樣は、表邊の形容にして、內は人心激昂して、恰も萬斛の炭火は鐵爐の內に焚灼せんずる勢なり。（鐵筆將軍曰、大綱、）いとも尊き万乘の勅語は、當日勃那巴の肝膽を寒うせしなるべく、男女老幼に論なく、敵の辱を蒙らぬはなかりし曉なれば、ひとり國辱を雪がん爲のみならず、仇に報ゆる心根は、岩をも徹す箭の根にも劣らざりしなり。四方には志士蜂起して、馬を鬻ぎ田を賣ツて刀鎗を購ひ、自由の魂を今にも見せんぞ、と勇ましくも其の身を犧牲に供したる忠義の精神は、なか〱に言語のよく盡すべきにあらず。（叙志士激昂之狀、雖文字少欵鍛錬、筆鋒鋭脫、勢透紙背。）嗚呼時として烈婦なきにあらず。見ずや天歩艱難の日、空しく仇敵に蹂躪せられて、王は擒となり國は亡びんとせるとき、

一の若安但克出で、迅雷を起し光風霽月を顯はしたるを。（不必詳陪客、用陪是小說文字。）今や普國の壯夫は若草の最愛に離別して方に是れ萊因河の畔に大咒哭し小咒哭し月色凄凉の活劇を演じ、方に是れ可憐無定河邊骨、猶是深閨夢裡人たらしめんとする悲哀小說と綴らんとするに（慘然之情、自在ヒ字中。○兩方是云々、用得沈痛、）忽ち綠髮を束ねて兵帽を戴き、郎が死するの秋今日にあり、と男裝して大呼したる者あり、嗚呼誰か知らんや、木蘭是れ女郎なるを。エレヲノーレ、プロシヤスカは年紀僅に十八歳にて、ボツツダム府の下士官が女なりけるが、夙に自國の兇賊の爲に虐使せられ、其の田園も皆踏み荒らされたるを洪嘆しつ、ありたり。一旦自由の旌旗翻ると聞き、窃に家を脱して男裝し、アウグストレンツと名を改め、當時義勇軍の名高き律綜將軍が旅團の歩兵となり、千八百十三年の秋九月十六日、ゴユールテ河畔に於いて、律綜將軍が敵騎を攻擊せしとき、大砲の彈丸飛び來りて、エレヲノーレの股を打ち碎きたれば、そが爲に遂に忠義の鬼となりけり。（簡而盡。）又シヤロツテ、クリユーゲルといひし女子も、當時慷慨せるかたなく、彤管を以て太刀に代へ、遂には昇りて下士官となり、鐵製十字牌（獨乙自由の戰に功勞ありしものに贈る賞牌なり）と獲たりしは、千載の榮譽なるべし。獨り此れ等の處女のみならず、九重の雲深きに人と爲りたまひし妃嬪さへも、悲憤の心を漏らしたまひぬる血氣は、何にか之を譬へんや。普王の九王女ハマイアン子公主と始めとし、三

月二十三日なりたる、愛國婦人協會といへるを建てたまひ、四月一日全國の婦女子に諭告したまひし、其の文に云く、

憫れ本國は危難に陥りしぞ、諸人ぞ、武夫の八十伴の雄はみな劍太刀を腰にとりはき、御旗の本にと集ひ来て、自由と獨立の血戰に裝へり。されば我等女子といひ、共に國の爲に打働くぞ本意なれ、勝利を求すぞ職分なれ、共に進みて本國の危難を救ひたまふべし。讀此森嚴之文、見此悲痛之語、誰有不切齒扼腕、感奮决起者。今此の協會を建て、我等不敏なりとも自ら進みて會頭となりまさむ。此れ協會は衆多の寄附を受領するなり、獨りたふとき黄金のみならで、夫妻の契約にとりかわせし黄金の指環も、耳の邊に飾りたまふ耳の環も、蠑の首のごとき頸の根に纒ひたまふ頸の環も、おこしたまふはその隨意なかし。やさしの手にて獲玉ふなる月毎の金額だも、器具といひ、麻布といひ、編みたまひぬる絨絲なり、其の他中々に黄金もて酬ゆべからぬ御手の仕業物も、寄せ送りたまふはいなみなさぞ。みな是れ本國の爲にと思ふ心がらにて、我が大丈夫の裝となし、鎧となし、若しも力の足りなんときは、戰の場に負傷せる人々の看護をもなし、そが病を癒やし、もて危き本國の爲に盡さむと思ふなるを。字々血、句々涙、不堪多讀、譯文亦高雅、非所可容他之口吻。天に在しまを神明の助けに此の協會も榮になり。一結力萬鈞。

と此の諭告に誰とて感ぜぬ者はなき。朝な夕なの裝飾の品も、貯へ積みし財寶も、此の秋こそ用に立つなれと、思ひ〳〵に寄送して、哀れ寡婦は今はしも何の爲にか養老の黄金を要すべきと覺悟をなし、貧しくして寶の一つだになきぞ悲しき山吹の乙女も、己が隨意に打ち働きて、八十伴の雄が毛裘を手織り寄せ送りたるは感ずるに餘りあり。

シユメツタウ卿のフエルヂナンダといへる女ありけり　歩兵將校の娘なるが、年二十一歳を始めとし、十一人の兄弟姉妹と共にベルゲルといへる處に一庵寺領を世襲とし、六百兩の養老銀にて住みけり。一旦愛國婦人協會の諭告文を讀むや、當時非職なる父は盛飾せる馬具を寄贈し、母と姉妹は指環或は飾りの寶玉を納附せり。然るに此のフエルヂナンダ　年十六なりしが、何に寄附すべきものとてなく、玉くしげ蓋を披きても愁の眉を伸ばすてふ十寸鏡許にて如何がはせむと物案じたるが、此の女は殊に平生美妙き毛髮をもちたれば、人々常に之を讃み讓りたまへ抔と戲ふもいひかくるなど數々なりければ、これぞよき代物なむめれ、と之を剪みて賣代にし、若干を協會に納めたり。之を聞きたる人々は、珍しき女子かな、其の黒髮はみまほし、またのぞましなれ、と賣手買手のはげしきに、其の價は忽ち騰上して、遂には四人の義勇兵を裝ふ程の金額とはなりき。一讀嘆撃碎唾壺。かくて黄金の指環幾千萬となく諸方より集まりたれば、協會にては後に

至り鐵にて指環を作り「千八百十三年鐵の爲ぶ金を寄附せり」と數字を銘して其の寄附者に與へられぬ、今の世も猶家の寶なりとて古を懷ひ秘め藏す家多かり。此の戰亂の世には、唐錦乙女の手業とて上下貴賤の隔てなく、絨毛を織りては軍服を裁し、襯衣を縫ひ、ますら健雄の雨露の凌ぎとなしつ、も、また解き崩しては綿撒絲となし、あるは病院、あるは陣屋にて負傷の者の手當をなし、寒き夜の月を踏み、荒れ野の霜に侵されて、うちならす火筒の音の木枯に吹きしをるもまたうてば火のいづる岩ほの石火矢をも屑ともせず、かくはしき花の容姿をふりみだし、彼處此處と立働きて、本國に報ゆる心の炎、世に例なきことゞもありたり。

了此悲壯事實、綴此悲壯大篇、不可欠此悲壯文字。

鐵筆將軍曰、壯人壯事、逢我壯友如君者、發爲壯作、字々壯、句々壯、一讀壯、再讀壯、三讀更壯、乃至一百千万遍讀、只有壯一字耳、可不謂壯絶千古哉。

又曰、前半如花散鳥悲、後半如虎嘯砂走、湊合甚佳、文之妙至此極矣、若夫指摘字句猶有散壯、固白圭之微瑕、不奇論可也。

○竹取翁物語講義　第十

琴條女史

これをも、あはれと見てをるよ、

これをも　此の歌をもなり　○あはれと見てをるよ　見ては清みてよむべしでと濁りて讀み此の歌をもあはれと思はぬさまなりとて見ゞての意に解きたる説あれどわろし、すでに玉の枝を譌の物とおもひまた此の歌をも僞と見、つれなくも、もてなしかねて、當惑したるさまなり。

大意、　既ニ玉ノ枝ヲホントノ物ト思ヒ、此ノ歌ヲモ僞ト思ヒ、如何ニシテモ此ノ御子ニ合ハ子バナラヌカ、ト當惑シテ居ル處へ、

竹取の翁、はしり入りていはく、此の御子にまうしたまひし、ほうらいの玉の枝を、一の所もあやまたず、もておはしませり、何をもてとかくまうすべき、旅の御姿ながら、我家へもよりたまはずして、おはしましたり、はや此の御子にあひつかうまつり給へ、といふに

此の御子にまうしたまひし　此の御子に乞ひ望みたるなり。○一つの所もあやまたず　銀を根とし、金を莖とし云々と姫のいひたるに、露ばかりも違はずといふ義なり。○何をもてとかくまうすべき　今は早兎や角と故障をいふべきいはれなしとなり。○旅の御姿ながら云々　斯くばかり厚き御心なり、といふ意にていへるなり。○あひつかうまつりたまへ　あひはたゞ添へたるのみ、意輕し。

大意、　竹取ノ翁ガ走リ入ッテ曰フニハ、此ノ御子へお望ミ申シタ蓬萊ノ玉ノ枝ヲバ、ソナタガ云ッタニ一ノ所モ違ハナイノヲ、持ッテお出デナサレタ、(是ハ眞ノ物ニ相違ナイ)最早此ノ上ハドウシテ、兎ヤ角ト申サウヤ、申ス筋ハナイ、旅ノ御姿ノ儘デ、御自分ノ家へモお寄リナサラズニ、お出デナサレタ、(是程厚リ御心ニ掛ケナサレテ居ルノダ)モハヤ此ノ御子ニお仕ヘナサイトイフノニ、

ものもいはず、つらづゑをつきて、いみじく、なげかしげに思ひたり、

つらづゑ　面杖なり、頰杖ともいふ、手を頰にあて、肘をつきたるをいふ、物思ひに沈めるさまなり。○なげかしげに思ひたり　なげかしげは嘆かしく見ゆるさまなり他より見て如何にもなげかしく見ゆる様に物を思ひ居たるなり。

大意、赫夜姫ハ何トモイハズニ、面杖ヲツイテ大層嘆カレサウナ様ヲシテ居タ。

此の御子、今さへ何かといふべからず、といふまゝに、えんにはひのぼりたまひぬ、

今さへ何かといふべからず　此處のさへ常の用ゐどころと異なれる故、耳遠く聞ゆめれど、よく〳〵思ひ見なむ、心得べきなり、今迄は兎や角いひていなみたれども、今ははや玉の枝を持て來つる故、此の上まで何かと故障をいふ事もあるまじ、となり。○いふまゝに　いひさまといふに同じ　○えんは縁なり

大意、車持ノ御子ハ、以前ハ兎ニ角玉ノ枝ヲ持ツテ來タカラニハ、モー何トモ言ヒ分ハアルマイ、トイヒ様、縁ヘ匍ヒ上リナサレタ。

翁ことわりに思ふ、此の國に見えぬ玉の枝なり、このたびはいかでかいなびまうさむ、人ざまもよき人におはす、などいひゐたり、

ことわりにおもふ　車持の御子のまか〳〵といひて、縁に上りたまひしを道理とおもひたるなり。これより下翁が姫にむかひての物語なり。○此の國に見えぬ玉の枝なり　まことに蓬萊より取來りたまへるならんといふ意なり。○いなび申さむ　否みまうさむなり　○人ざまもよき人におはす　容兒よき人なりといふ意なり、性質の善き人なりといふにはあらず。此は翁が様々にいひて姫の心を取り、いかにもして此の御子に合はせんと勧むるなり。

大意、コレヲ見テ翁ハ尤ナ事ニ思ツタ、シテ赫夜姫ニ向ツテ、如何ニモ此ノ國ニハ見エヌ玉ノ枝ダ、（蓬萊カラ取ツテ來ナサレタニ相違ナイ）此ノ度ハドウシテ否ヤヲ申サウヤ、申シ様ハナイ、此ノ御子ハ御器量モ善イ御方ダナド、言ツテ居

タ。

内田遠湖氏の美鼎一齋は次號より掲載すべし





連中を。私未だ部屋住の身でありながら、昨夜もらつた花嫁御の境涯を書くは、日光を見ずして結構を説くよりも、嗚呼がましき業なれど、其處がソレしやすばいがら……。斯うもあらうかと書いたのが、まぐれ中りにでも中ツたなら、天晴れウイ奴ト只一言——その爲め味噌をかくなん。

○花嫁御　文庫の　漣山人作

朝の段

今日は又朝から麗らかな小春日和。何處の粹樣か、——椽の雨戸まだ開けてはないが、性惡の朝日影、櫺子から無遠慮にさし入て、閨の中いつとなく明るくなり、誰見ねど何とやら恥かしい此の態。立て廻はした屛風まで、なほ眠る鴛鴦の番……今はなんの羨ましからう。傍を見れば、良人もまだ閉ぢた眼。醒めぬ間にと靜かに抜け出し、あとを風の入らぬ樣にソツと押えて置く。——暖かいは夜着よりもその情。寢亂れた髮をかきあげながら、立上ツて帶をしめ直し。——まだ慣れぬ吾が家、足音を盗んで、障子さへ一寸づゝ。聲は立てねど香に立つて、——麝香か龍腦か、匂ふて人か部屋か、——心憎い限りは是だ。

嫁は厠へ行かうとする時、折り曲がツた椽側の角で、圖らず出逢ふた下女の某、襷片

手ではづしながら、小腰をかゞめて=お早うございます=。珍くもない挨拶だが、今朝も何故か耳立て、妾をなぶるかと、氣が廻るのもしおらしい。

厠から出て見れば、何時かそこな侍妾のお秋が、水杓取て水をかけながら、小聲で=アノ旦那樣も……=。その―旦那樣――、自家でならば父上の事、それを今日からも異ツた意味で、彼も云ひ吾も聞く。が、まだ慣れぬ言葉、返辭に惑ふのも無理でない。お秋も重ねて、=まだ聽く入らツしやいませんに=。=ア、=漸く出した一句。=そんなら直ぐお淨手をお遣ひあそばせ、今にお目ざめに成りますと……=ト、先へ立ツお秋を一寸扣へて=何邊へ行くノ=。=よろしうございます、此邊へ=。」

導かれて行て見れば、此處も湯殿。建て、から間も無いから、檜木の香鼻を突くばかり。流しの臺の上には、立派に磨いた真鍮の金盥と、新らしい手桶が二ツ。一には水、一には湯が入れてあり。その側に楊枝や歯磨を載せた少さな臺がある、流しの前の板の間には蓙が敷いてあツて、その上に更紗の蒲團が待て居る。此の板の間に續いて二疊ばかりの間があツて、その隅に新らしい鏡臺が置いてある。此の鏡臺を見ると思ひ出を――此鏡臺を誂らへるに付て、種々の形を見る爲めに、此間お秋と一所に芝の勸工場へ行た。その歸途愛宕下の街道で……行逢ふた事。――そしてお秋に一寸なぶられ

た事。

‖アノお髪は後程髪結さんが参りますから、それまで一寸なで付けておきましやう‖心‖そんなら一寸撫で付けくれくれ‖。鏡に向へば、吾ながら恥かしいまでに、耳から襟へかけて掛る鬢のほつれ髮、今顔洗ふ時斯うなツた、ト……まさかに云譯もならぬ……。處へ聞ゆる咳拂ひ、良人が起きたかト思ふまもなく、隔ての戸を開けて這入て來て、思はず見る鏡の方、思はず寫つる顔と顔。はツと思へば嫁の顔も、さや大理の石像に夕日が映ツたやうに、鏡にあり〱と、——お秋の手前思へば猶さら。お秋の心では又、‖アラ惡い處へ。もツと臥しなツて居らツしやればよいに‖。

其中に身仕舞をすまし、衣裝も着かへて、奥の居間へ這入て來た。此時よく拜めば、年は十八か……十九には成るまい。脊もスラツとして、女らしくは反身の方。顔も所謂る玉子なりで、眉毛も濃く。眼は細いけれど涼しく、一寸物を斜眼に見る時、堪えられぬ愛嬌あり。鼻は高く、口元キリヽツとして賢さうに、ふツくりとした頤、やゝもすれば二重になツて、觸ツたら温かでスベ〱しさうな。色は生れ付て白く、唇は元來が朱いから、紅も白粉も功も立てられまい。髮も昨夜の儘の島田ながら、その艶々しさ水が垂れるばかり。緋鹿子の手柄、鼈甲の櫛、一層引立て見える。黄縞の糸織の綿入に、

黒縮緬の綿入羽織、背に酢漿草の紋が付てあり。帶も黒紵絲と茶博多の腹合せ、まだ仕付糸の付たまゝ。海老色に金の金物の付た帶止め、藤紫にあッさりと染め出しのある汗襦の襟。この上品な扮装で、その上品な佳人が、靜に我が傍へ近寄て來るのも、良人も一向平氣で見向きもせず、長火鉢の側で煙草をふかしながら新聞に餘念もなく、我ものと極れば騒ぐにも及ばぬと云ふ風。——アノ面お憎さ。

嫁も同じく長火鉢の側に坐を占め、右の手を火鉢の縁にかけ、左の手をれとなしく膝の上にのせた。その白い透明やうな手に、金黄の光をはなつ指輪、此だけ切て硝子の箱に入れて置きたいやうだ。暫らくは無言であッたが、近所に人が居ぬので、少し心をゆるしたとも云ふ風情、言葉もなれ〳〵しく、‖一寸ろッちの新聞拜見な‖。‖これかイ‖、取ッて渡したのを受取ッて、膝の上で眺めて居たが、表の側は冷淡に目を通したばかり、二頁目の第一欄の處に暫らく視線を注いで居たが、良人の方を見返ッて、‖アノ明後日郎君も御所へ入らつしやるんですか‖。‖ナニ明後日か……、禮服が無いもの。……行かなくツたツて……‖。‖妾も學校へ行かなくればならないのかね‖。なぜ、まだ學校へ行てるのか‖。‖平常行かなくツても、明後日は行くんですとサ。……嫌だネ‖。‖ナニ譯は無いぢやないか‖。‖だツて……いやですア子‖。

處へ襖の開く音がして、そこへ現れたる朝餉の膳部。給事にはお秋と思ひの外、まだ名も知らぬ廿年ばかりの女、同じ位の年頃だけに、何處となく氣が引けて、なんだか顔を見較らべられるやうな心持、飯も身に成らうか。

漸くにしく朝餉をすまし、膳部も片付了ツた時、良人は下女に向ツて、‖アノお父さんの方ぢやアまだ御膳か‖。‖イヽエもうお濟みに成りました‖。‖それぢやア一寸行て来やう。下駄を庭の方へまはして‖。‖へイ‖下女は立て行た。‖面倒だが儀式だ。一寸お目に掛ツて来やう‖。‖ハイ、アノ此儘でよござんしやうか‖。‖ナニかまふもんか、内輪だもの‖。縁側から下りて庭から庭、母屋の縁の處まで来ると、其處に遊んで居た良人の弟、此年七才になる春二が、二人を見るより飛んで来て、‖兄イさん奇麗だらう此花‖。今折ツた薔薇の花をさしあげて見せた。が兄は冷淡なもので、‖春二、お父さんは‖。‖アヽお居間に居たよ、お母さんも‖。‖さうか‖ト云ツた切りなは靴脱の石の方へ二三歩。春二も今度は嫁の方へ来て、‖お冬さん奇麗でしやう‖。‖マアよく咲きました子ー、妾は此花が大好きですよ、何處にあるんです‖。‖向ふのお庭に、まだ澤山ありますよ、取て来てあげましやう‖。駈けて行かうとするのを、周章て、押しとめて、‖イヽエよござんすよ、そんなに取るとお叱り受けますから‖。

‖なアに叱られやしないけども‥‥そんならこれあげましやう‖。‖あり難う、お家へ持て行て大切に活けておきますヨ‖。

此時座敷の障子をあけて、舅は縁側へ出て兩人を見やりながら、‖オ、來たのか、前から知ツて居るのだから、まざ／＼引合せにも及ばん、ハ、、、、まア此方へ上り、この縁がよかろう暖かで‥‥‖。續いて姑が、‖オヤ此冬さん、まざ／＼まア、さア此方へお掛けなさい、アノ誰かれ蒲團を二三枚持てお出でよ‖。元より以前から懇意な中、此家にも度々遊びに來た身であるから、挨拶も遠慮もよい程にして、縁側へ腰を掛けると、姑は頻りにちやほやする。‖そこより此方が暖かですヨ。サ蒲團を、‥‥イ、エおちやおい‥‥冷るといけないから‖。‖大層紅葉がよく成て參りましたね‖。‖ハア、大分色付て來ました。今に裏へ行て御覽、菊がよく咲てますから‖。‖さうでございますか。もう御菊見もよろしうございましやすね‖。‖團子坂も大分出るさうではヨ‖。‖お母さん／＼、今度の日曜に團子坂へ連れてツて下さいナ‖。‖ハアれ天氣がよかツたら行きましやう‖。‖妾も一所に參りましやうね‖。——何日でしたツけね、春さんと一所に瀧れ川へ行ツたとがありましたね‖。‖オ、さう／＼、あれは‥もう去年になりますかね‖。‖ア、、あの時はほんとに面白かツた。兄さんやなんかで山の中を方々

歩いて……ソラあの時お冬さんが、こゝがツてあの山が登れなくツて、——兄さんに手を引かれてやツと上ツたア‖。アラ草を踏むで蛇、飛んだ古瘡を……でも小供は罪のないもの、一向會釋なくしやべツて行く。‖それから王子で、滊車にのる時面白かツた、何處乎の奴が喧嘩しやがツて……。それから上野で下りると、醉ばらツた書生が、兄さんにからかツて、……喧嘩を吹かけやがツて……‖。‖よくまア覺えて居らツしやるねー、ほんとに春二さんは覺えが善いと‖。‖それぢやアお前覺えて居るかイ、アノ歸りに車の上で、お母さんの膝の上で居眠りをして帽子を落したとを……‖。‖ア、あれがア……。

つまらぬ話に時を移す中、向ふの居間の内で時計の音九ツ。良人は心付いて、‖オヽもう九時だ、出かけなけりヤならん‖。‖貴樣今日も出るのか‖。‖エ、此頃は忙がしいもんですから、それでは又……‖◎お冬も立て丁寧に禮をしながら、‖誠にお邪魔でございました。春さん後にお遊びに入らツしやいヨ‖。一双の新郎新婦、親の目には桂男が花精とつれだツて行くやうに覺え、喜悅の眥に尻餅をつかして後姿を……見えなくなるまで。

吾家へ戻れば、良人は直樣衣服部屋へ這入て、はや日本服の帯をときかけた。それと

見て先刻給事に出た女、急いで此部屋へ這入て来たが。――今日からは、奇麗な、優さしい、ろして信切な方が出来て、今まで自分の仕て居た役目を、とるやうに成た、ト氣が付いて見れば、何しに此部屋へ来たやら、何となく手持無沙汰な風であツたが。‖車でもうよいか‖ト、云はれたを立機會に、‖一寸さう申して參りましやう‖。お冬はぬぎすてた良人の着物をた、んでしまひ、立上て良人の後へまわり、力を添へて外套をきせてしまツた。處へ中働きが歸て来て、‖アノお車はもうよろしうございます‖。‖ウン點頭いたばかり。急いでその部屋を出て、一端自分の居間へ行き、机の上の時計を取て胸にかけ、書類と一冊の洋書を小脇にしながら、‖それぢや一寸行て来ます‖。自分獨りで急ぎ足に玄關の方へ行くのを、追ひかけるやうにして付て行けば、はや玄關の敷臺の上には、書生の某と中働きの女と、例のお秋とが左右に狛犬の真似をして居ると、車夫は毛糸の膝掛をか、へながら、車を押へてひかへて居る。良人は靴を穿いてしまツたが、見れば頭に帽子がない、ない筈彼の帽子掛に、ちやんと掛てある黒の山高。‖アラ郎君帽子は‖。‖オ、忘れた取て呉れ‖。中働が心得顔に取らうとしたを、起しも立てず帽子掛から取て、塵を一寸拂つ、渡すと、其儘冠ツて車へ乗ツた。梶棒が上ると同時に、四個の頭は下へ垂れた。車は門を……はや見えなく成た。何となく心細い

やうな氣がしたが、そのまゝ奥の方へ行かうとする時、勝手から玄關へ來る中の口の、五寸ほどあいた戸のすき間から——眼が一ツで赤い頬の化物が……。フッと見たら、直く消えてしまツた。

○美人車　　飯臺思案外史作

其二——夢にも……幻にも君が面影

老女の化粧とも見えさ殘んの月影も、ハヤ東の空へ名殘なく消えて仕舞ツて、朝暾が空に真紅の糸を引いた。

「ア、寒い、どうも朝方は……ひどい寒さだこと。

云ひながら煙草を——それ〳〵棚の中へ列べて居まを——一人の小女が——

「どうも手の先が……丸で氷る様だよ。

ハタキを右手に持ちながら棚をたたき。

「毎日〳〵れ天氣がい、と、塵がひどく立つものだから、どうもひどいで みだこととこんなに。

脇にあツた淺黄の手拭を鳥渡開いて、島田髷の上へフーワリと載せ様とした。

「アラ　モウこんなに髪がこはれツちまツたよ……一昨日叔母様に結ツて戴いたばかりなのに……(一寸右の手で鬢の處を觸ツて見て)こんどは銀杏返しに結ツていたでかうや(首を傾け)ダが　どうも銀杏返はどツか下卑て居る様で……いやないよ(笑の漣を　紅なる頰に現はした)ホヽヽ何に結ツたツて、妾の様に寐ざうが惡くツてはお仕舞だよ(ます／＼獨りで笑ひ出しました、イヱ笑ひ出さうとしました)今朝も叔母様がさうおツしやるンだもの、おりやうが、昨夜もまた妾の足を……オホヽヽヽ夜中に蹈んだツて……其爲め吃驚なさツて　とう／＼お目が醒めたツて……其癖自分は夢中で……チツトモ知らないんだが、妾も世間で云ふ、ハヽヽ寐坊の女教師か知らん(ます／＼嬉しさうに笑ツて居ますヽ)ハヽヽヽヽオホヽヽホ(急に思ひ附いた様に)ダが　こんなに　なか／＼笑ツて居られる譯には行かない、どうも昨夜の様な御容子では……叔父様は所詮……急にかうと云ふ譯でもあるまいが(太い吐息一とつ)所詮……元のお身体には(思はず　アヽ　と太い息を吐いて)妾が目でも　どうも……叔母様がお可愛さうで……　お口の先では　いツでも『ナアーニ／＼』と云ツていらツしやるが――お心の中では――お胸の内では、どの位……アヽ傍で見るのもお氣の毒で……アヽ　これを思ふと　イツソ　妾がお身代りに死んで仕

舞たい……

右手に持ツたハタキを一トつ棚に當て、

「アヽ　こんな事を云ツて居て、肝腎の掃除を忘れてしまツた　ドレ早く掃除を仕て
しまはないぜ　また昨日の朝の樣にお客樣に笑れるよ、

思ひ直したり　熱心に煙草をそれ〴〵戸棚の中に列べて　玻璃戸をはたかうとすると
向方に美人が……ションボリ。

「オヤ

思はず洩らして暫ばし　ハタキの手を休めた。

「オヤ

又一ト言　云ツたぎり　暫し呆れて居た、其女の姿に見とれて居さ。

「オヤ。妾を見て笑ツて居るよ、いやな……何がおかしいのだらう……？　人を馬鹿
にしてサ……いやアナ。

云ふトタン　其美人は跡なく消へた――かき消す樣に――

「オヤ　居なくなツたよ、れかアシナ……

こゝで『ホヽ』と云ふ笑ひ声が何處となく聞えた。『アラ』と向ふと見ると又現はれ

た──以前の美人──

「アヽ　どうしたんだらう　また来たよ　此人ハ…

見ると不思議　顔容が──以前の姿ヿ引替へて──非常にやつれて居た。鬢のほつれ毛が　幾本となく、雪なを頬へ　ムシロ青ざめた顔にかゝツて居た。ソレが朝風ヿ靡いて揉れて居た。

「オヤ　みすぼらしい……

思はず獨言を云ツて小女も──我形を恨んで、風の糸柳とも見える鬢の亂れ毛を掻き上げるとます〳〵不思議！　前の婦人も同じ様ヿ──鬢の亂れ毛を掻き上げて居ます。小女は太い息を洩らした、

「アヽ　かうも　やつれるものかしら

『アヽ　見ツとも無い』　獨言ちて下を見れバ「カメオ」の煙草一箇、取り殘されて戸棚の前へ落ちて居た。その上ヿも美人の面影。

「アヽ　モウ　そろ〳〵いつもの……　官員……さんが御通りヿなる時分だよ……オホヽヽヽ髮てもチアンとしてれかうや。

愛らしい、何處迄も愛らしい顔──降り積む雪を掻き別けて咲いて居る薄紅梅とも


其



見比べる——顏を一寸上げて見ると——噂をすれば影とやら——黒塗の車一輛。此方に向ツて馳けて來る……載せて居る人は……ソモ……

「オヤ……アノ車だよ……いつもの……アノれ方だよ……

馳せ來る車矢庭に此美人車の前に其梶棒を下ろした。車の響が止まると小女の胸が轟きだした。スルト下り立つ一人の紳士——黒綾のフロックコートをゆたかに着た年少の美しい——紳士。

「シガアを少しばかり……

思はず見合す顏二つ——四ツの眼球は那邊をさまよふ？

「……」「マニラ」に致しませうか……「ハバナ」に……どちら……上げます……

小女が幼の心は何處を浮かれ歩行く？

果敢なきものは、戀衣縫ひ初むる乙女心かも。

＊　＊　＊

『營業人力車駐車場』と書いてある棒杭の傍ふ、梶棒を列べて居る數輛の人力車、そこに腰を掛けて居る數名の車夫。其名の態にも劣らない程な黒い顏をしたのもあれば、虎の

仇名通り、鼻が聳いて居るのもあります。客を待間の浮世雜談――

「コウ　吉……暫く　てめエと一處にならなかツたナ。

云ひ掛けたのは四十前後の逞しい骨々しい男、栗のイガよりモツトこはい頰鬚を勿体さうに撫で丶かく云ツた。

「ほんとにヨ　暫く會合さなかツたの。

同じ様な挨拶をしたのは二十四五の男盛り、車夫には珍らしく白の生ツ白い勇みの兄イでを

「時に　エイ　コウ　いやに寒くなツたナ。

「さうよ　どうも己らアどう云ふものか寒サが大の禁物よ。

「時候に連れて懐合も寒くなるンぢやアねへか。

「おめエぢやアあるめへし、時候が寒くなツたツて、お召物の出し入れに氣を揉む様なお兄イ様たア　違はア

「甘く云ツてやアがらア、過日もアノ絆纏を出すからツて、一兩かしてくれと拜んだぢやアねへか、アハ丶丶丶

「そりやさうと、今度此度おふれが變ツて、黒のハツピに限るとしたなア……豪氣に

鉢巻に頭痛だなア

「違へねエ。風俗はいゝかもしれねエが、コシトラにはひどく當る奴サ。

「態の畜生奴ッ　風俗なンて　いやアに洋語を使やアがるナ　生意氣ナ　それよりアノ書生にかけて見ヤ、

「だめだッて事よ、アンナれ芋がなんしにお車に召すものか？

「そら来た、こんだこそ、アノ年増ね……

「駄目だア　あらア直ぐ横町の師匠だア。

「……こりやア　大失策だア。

互に口角に泡を吹いて談し合ツて居る處へ、向方から空車を引いて来かゝツた黒鴨仕立の車夫見るより此方の二三人声を掛け、

「ヤア。

「マア　休んでいきねエ、

云ツたぎり双方首肯たばかり、下等社會の禮法ほど簡單なものはないです。

「どうしてそんな事が仕て居られるものか、大變な急な御用があらア、

「アハヽヽヽ吉の野郎め、急用があるッて、何にヲ……

「ナアーニ　外でもねヱが　頗るツて　のがお待ち申して居らア、
「アハヽヽヽ何を云ふかと思やア　吉の人情談も久しい奴だ。
「一体そりやア何者だア。
「ナアーニ　アノ　ソラ美人車とゐふ居る娘の事よ、
「アハヽヽヽヽモウそばしこく水道橋の角に目を附々た奴だ、道理で吉の野郎　此頃いやに巻煙草をフカすと思ツた。アハヽヽヽ
「ソーヨ　態のめヱだが、己らア　あの位ゐな美人は……恐らく世の中にあるめヱと思ふよ、
「豪氣と肩を入れる奴サ、
「ダが　吉。思ひ切りねヱ、ありやア駄目だ、及はぬ戀だア。
吉とやら　これを聞いて思はず真面目になツて、熱心に問ひ初めた。
「ナニー　なにが駄目なんでヱ、
「駄目と云ふのは外でもねヱが。　あれでも元はレツキとした旗元のお嬢様で……
「それがどうしたんだ
ます〳〵熱心に聞きたゞしました。

「サウ　周章なさんな
「其旗元が娘で……
「ヱ、　分ツて居らア、　其旗元の娘がどうしたんだ
「其旗元の娘が至ツての縹致よしで……
「　ヱ、分ツて居らア、
「マア　聞きねヱ、縹致がいゝから　彼處でも嫁ヱ欲しい　此方でも婿になろうと申し込むんだが　どう云ふものか肝腎の御本尊が承知しねヱ、
「ハテナ　ハテナ　それからどうした
「それから、親類もあんまり變に思ツて、よーくたゞして見るとそれも其筈、尤の譯だ……　とうふお安直の簞笥と来て居らア、
「アハゝゝゝ、虫が附いたと云ふ洒落か、
「だまツて聞きねヱ、其儘うツちやツて置かうものなら　それこそ兩人手に手をとりが鳴く……ツてヱナ譯になる處を女の方の兩親が——其時代には珍らしい——開化した奴で、　出来たものなら仕様がねヱ　トとう〳〵其男とれいひなづけと云ふものにしたとよ、

これを聞いた以前の車夫――吉とやら――驚き呆きて暫し――愕然――思はず握ツて居た梶棒もゆるむまで

（嗣出）



○支那開國始末（露國東洋語學博士貝斯徳尼氏著百十七頁 麹町區下六番町同勞社出版部發行定價卅錢）

此の書は露國東洋語學博士ボスドネフ氏の著述で、加藤稚雄、木下賢良兩氏の合譯されたものです。其の價値の如何は、本社の特別寄稿家岡本武雄氏の序文を見れば、能く分ることと思はれます。乃ち爰に其の序文を掲げて批評に換へませう。

歐羅巴諸國が東洋に向ツて通商貿易を開きしより爰に數十年を經たり。當初は其の國の風俗人情習慣を尋ね、國民の嗜好に適して其の計を爲せしにより、利益を得ること日に益々多かりけるが、爾後東洋の文化未開けざるを覺り、之を異種の民類と

見做し、甚しきに至りては附するに野蠻未開の名稱を以てし、支那人に對しては殊に甚しきを極めたるより、遂に其の激怒を招き、互に嫉視睥睨して紛紜絶へざること久し。即千八百三十九年鴉片煙燒却の紛議、千八百六十年英佛同盟軍が北京を攻擊せし結局、千八百八十五年佛安の關係の如き、支那人好みて之を挑發せしう、將歐羅巴人自之を構造せしか、少しく事理に通ぜるものは其の支那人に與して、歐羅巴人に與せざるや明なり。頃日露國東洋語學博士貝斯德尼氏が支那開港以來歐羅巴諸國との關係を論ぜしものを見るに、初に支那國の大体及地形其の紀元を說き、尋いで歐洲諸國が支那に交通せし顛末を論じ、次に開港以來歐羅巴諸國の使節宣教師等が首として鄙劣手段を取り、次いで脅嚇手段を用ひ、加ふるに兵力を以てして、遂に鴉片の戰爭及天津の攻擊を爲し、爲に支那人民をして歐洲人を忌憚せしめ、之を目して殘忍酷薄の惡漢と認むるの已むを得ざる所以を痛論し、次に今日となりては支那人の或心を喚起して、大に海陸の軍制を改良し、造船造兵の各廠を諸方に開設し、非常の進歩を顯はせしのみならず、商業貿易は原來支那人の卓越せる所にして、方今に至りては殆ど歐羅巴人を凌ぐの勢あるを記し、次に露國と支那國との關係は全く他の歐洲諸國と異にして、常に親密を旨とし、曾て兵力を用ひず、殊に英佛同盟軍が北京に侵

入せし時、露の全權公使義古那節夫氏が其の間に周旋して、此の同盟軍を北京より退去せしめ、平和の條約をなさしめたるは支那人の記念に存して、其の親睦を失はざる以所たるを述べ、又貿易を他の歐洲諸國に對して衰頽するとも、露國に於いては地理風土の關係により、年に月に盛大に赴くの實理あるを說きしと、此の書の要領にして、極めて其の肯綮を得たる所あるを見るなり。要するに氏は能く支那國の狀態に通曉し、其の史乘に獵涉せしを以て、其の事實を指し、其の顛末を論ずるに、甚痛切にしく、彼の從來東洋の膏血を搾取せんとせる國人をして、其の權謀術數を掩蔽すること能はざるに至らしめたりといふべし。且其の論說中、支那と歐洲諸國との關係は、露國人即局外者の論斷なるにより、更に偏倚する所なく、直筆以て其の可否を判別せしは、大に吾人の意を快からしむる所ありとす。余は苟も東洋の局面に心を用ふるものは、宜しく一讀せざるべからざるの書たりといふに躊躇せざるなり

明治二十二年六月下澣

岡本武雄

○真理第一号（神田區駿河臺鈴木町世光社發行）

真理は高等純正なる宗教、美術、文學等の論說を揭げ、專ら其の真理を講究し、其の時

論を痛評するを本領とするもので。第一号ハ「立憲最後の事業、基督信徒の責任」と題する面白き論文のほか、種々の有益なる事項が載せてあります。吾人は熱心ニ其の益々盛大ニ赴かんことを祈り、愈々真理の發表せられんことを望みます。

○文學評論柵草紙第一号

今日我邦の文學界ハ、雜駁混濁の極ニ達して居ります、此の時に當ツて、文學評論柵草紙を發行せられたのハ、實に偶然の事でハありますまい。柵草紙ハ他の坊間の諸雜誌と比べるときにハ、如何ニも超然たるもので、所謂群鷄中の孤鶴です。が、其の記載の諸項、悉く感服するものばかりでハありません、遠慮なく言へバ、飜譯などハモ一層注意して貰ひたい、評論の着眼もモ一層高くしてほしい―世間の評判ほどでありませんから。



○周防の内侍の話

衒遠樓主人

後拾遺集哀傷の部に、後三條院位につかせたまひての比、さみだれひまなくくもりくらし、六月朔日まさかきくらし雨ふりければ、先帝の御事などおもひいづることとやはべりけん、

さみだれに、あらぬけふさへ、はれせぬは、空もかなしき、ことやしるらん。

周防内侍

とあるよりかんがふれば、此の内侍の後冷泉院につかうまつりたることの知らるゝなり。又同じ集の雑の部に、後冷泉院うせさせたまひて、世のうきことなど思ひみだれて、こもり居て侍りけるに、後三條院位につかせたまひて後、七月七日にまゐるべきよしおほせごと侍りければ

あまの川、おなじながれと、きゝながら、わたらんことの、猶ぞこひしき。

といふうたあり。帝王系圖に、後冷泉院、後三條院、白河院とつゞかせたまへば、此の内侍のつかへられしは後冷泉院にて、後三條院のめさるゝにはまいられたるなるべし。白川院の女房、堀川院につかへし、などいふ説はあかるべからぬことなり。さて此の内侍住みなれたる家をはなれて、外へうつることにつき、名高きはなしあり。金葉集のこと

きかに、家を人にはなちてたつとて、はしらにかきつけてはべりける。

周防内侍

住みわびて、われさへのきの、しのぶ草、しのぶかたがた、しげきやどかな。

鴨長明の無名抄に、周防の内侍の、われさへのきのしのぶ草、とよめる家は、冷泉堀川の北と西のすみなりといへり。信實朝臣の今物語に、むかしの周防の内侍が、家のあさましながら、建久の比まで、冷泉堀川の西と北とのすみにくち残りてありけるを、行きて見ければ、我さへのきのしのぶ草、と柱にむかしの手にて書きつけたりしがありける、いとあはれなりけり、これを見て、あるうたよみのかきつけける。

これやその、むかしのあとゝ、おもふにも、しのぶあはれの、たえぬやどかな。

又西行法師の山家集に、周防の内侍、われさへのきの、とかきつけたるふるさとにて、人々おもひをのべける

いにしへは、ついゐしやども、あるものを、なにをかしのぶ、なるしにはせん。

とあり。かくのちのちの歌よみにも、しのばれたる人なれば、其の人も在り、および歌よむことにたけたることども、強ちにいふにしもたらずかし。

○母の稱呼（承前）

鶯陵迂人　山下重民稿

おふくろ

貞文雜記云人の母をおふくろといふは、おふところといふこと也、母が懐妊の時、子はふところにある故なり。ふところを略してふとろといひ、ふころと云詞轉じてふくろになりたるなり。今も薩摩國の人は人の母を御懐と書なり。袋といふにはあらず。一説に人母の胎内にて胞衣をかぶりつゝまれて、袋に入れたるが如くなる故、御袋と云ふといへり。此説用ひがたし。御ふくろと云事、旧記には見へざる名目なり后宮名目抄と云書に、右の胞衣の事によりて。御袋と云説見へたり。其書は大納言爲兼卿の息女御櫛笥殿の、中将といひし女房、鎌倉将軍の御臺所へ、書きて參らせられし書なりといふ。然らば久き名目か。

同書標注云鎌倉年中行事にも御袋様と云事あり。

玉かつま巻八云。人の母と御袋といふこと、中原康富記に、享徳四年正月九日、今曉室町殿姫君誕生也、御袋大館兵庫頭妹也。

重民按するに、懐と袋との説兩様あれど、僅かに身の中にて表裏の隔あるのみなりされば其義何れにても通ずべし。而して世間多くは御袋の文字を用ふれば之に従ふ

べきに似たり。

○○○○○ えゐううへ　母上の義か、謡曲に之を用ふ。

○○○○○○ て、じやひと　母人の義。院本多く之を用ふ。

方　言

○○ かく　西國　○あひい　長崎 阿姚なるべし　○あらぱ　佐賀 阿母なるべし

○○ たゞ　出羽　以上和訓栞に見えたり。

○○○○ おさゝむ　高知地方　○ちッち　北海道　乳の義か。

○○ はゝ　鹿兒島　○はぽ　蝦夷　此蝦夷語は蝦夷風俗彙纂に見えたり。

按ずるにはゝはぽ共に阿母の義か。而して南北兩隅の國相距ること遠くしては僅かに清濁を異にするのみ。其語のかく同じきは奇なりといふべし。

是より漢土の稱呼を掲ぐべし。

妣。

爾雅云父爲レ考母爲レ妣。郭璞註云。禮記曰。生曰二父母妻一。死曰二考妣嬪一。今世學者

從レ之。蔡尚書曰。大傷ニ厥考心一。事ニ厥考厥長一。聰聽ニ祖考之彝訓一。如レ喪ニ考妣一。公羊傳曰。惠公者何。隱之考也。仲子者何。桓之母也。蒼頡篇曰。考妣延年。書曰。嬪レ于レ虞。詩曰。聿嬪レ于レ京。周禮有ニ九嬪之官一。明此非ニ死生之異稱一矣。其義猶ニ今謂レ兄爲レ昆妹爲レ媦即是此例也。

按ずるに、此說に據れば妣は未だ必しも歿後の稱にあらずと雖も、今は漢文を作る者は、禮記に從て一般に歿後の稱とすれば、生前の稱には用ゐぬ方宜しかるべし。

孃。

和名類聚抄云楊氏漢語抄曰阿孃 阿孃又見新撰字鏡 狩谷掖齋曰按木蘭詩云。旦辭ニ爺孃一去。暮宿黃河邊。阿孃之名出レ於レ此。木蘭詩又云。阿爺無ニ大兒一。木蘭無ニ長兄一。呼レ父爲ニ阿爺一。呼レ母亦爲ニ阿孃一也。

按ずるに、木蘭は婦女にして男裝を爲し、匈奴征伐の軍に從ひし者なり。事は古詩大觀等に見えたり。

言行錄後集輯釋云、正家通曰。俗稱レ母曰レ孃。古樂府。不レ聞ニ耶孃哭レ子声一。惟聞黃河之水流濺々。又後世稱ニ母后一曰ニ孃々一。或以ニ大小東西一別レ之。蘇轍龍川雜志曰。仁宗謂劉氏爲ニ大孃々一。謂ニ楊氏一爲ニ小孃々一。

按ずるに孃の字はもと詩より出たる文字なれば、今日にても專ら詩に之を用ゐ、文に於ては小說等の外あまり用ゐず。

媼。

史記趙世家。左師觸龍說二太后一曰。媼之愛二燕后一賢レ于二長安君一。〇地神曰レ媼。張晏曰。坤爲レ母故爲レ媼。

按ずるに。媼は老媼と熟字し、老母に用うるを例とす。

嫗。

說文云。母也。廣韻云。老母也。

前漢書高祖紀云。有二一老嫗一。夜哭曰。吾子白帝子也云々。

晉書云。山濤見二王衍一曰。何物老嫗生二寧馨兒一。

按ずるに。嫗も亦媼と同じく。老母の稱なるは右の書にて明かなり。

萱堂。

葉夢得遣レ模歸二覲石林一詩。白髮萱堂上。孫兒更共誰。

按ずるに。北方は陰なれば、婦人は北堂に居る者とす。而して說文云。藼令二人忘レ憂之草。一名宜男。一名忘憂。卽今之鹿葱也と見え風土記に懷孕婦人佩レ之必生レ男

とあり。されば古くより之を母の事まで用ゐて、其稱とは爲せしなり。今は多く他人の母を指していへり。

北堂。

詩衛風。焉得諼草言樹之背。傳。諼草令人妄憂。背。北堂也。儀禮士昏禮。婦洗在北堂。疏。房與室相連。謂之房無北壁。故得北堂之名。

韓愈示兒詩。主婦治北堂。膳服適親疎。

右に掲ぐる所は普通の稱呼に就て、聊か解釋を加へたる者なり。母の稱呼此に止るにあらず。他日間を得て追補する所あるべし。

○ジヨン、グレー姫の傳

圓山おとね女史譯

ジヨン、グレー姫は紀元千五百三十七年の御出生にして「ドルセツト」侯ヘンリー、グレー第一の御姫君なり。母はマリーチウドルの御姫君にて、フランシス、ブンラドンと申し英吉利王顯理第八の御妹君なり。かやうに、此の姫は英國の王族にて、御歳若の御連枝に渡らせらるれど、もし顯理第八世に御子孫あらせられざるときは、王冠を受け續くべき御方は此の姫の御姉君に渡せらるるスコツトランドの女王マルガレツトこそ當然なるべけれ。

姫は御両親の別業に御生長遊ばし、其頃は王族の中、相當の御位を續ぐべき御方の此の姫の外に猶ほ多く在しませしにより、王位の御相續などは、何人も存じ寄らざることなり。姫は天成の麗質にして、其眼の圓くして温和なるは、其意ざまの順良にして悍からず、然も物事に屈せざる御氣質を顯はし給へり。猶ほ其の意思の純正なることは、殊に著るしくして、姫の御いとこ君なる女王エリサベスの侍講ロッシェル、アスシェムと申せし人は親しく姫を識る者なりしが、此人姫の事を人に語れるに、其擧止の端正にして謹み深く、凡べて勞動を厭はず、兼て種々の才藝に長じ給へること、女子として實に申し分なく、又フランス、イタリヤ語にて談話すること、自國の語にて談話すると少しも異なることなくして、又ギリシヤ語にて余に語れることも屢なりき。其手蹟は殊に美はしく、且法に適ひ給へり。余は常に此の秀才女子の眷遇を受けしこと淺からざるにより、日耳曼に出立する前一日レセステルシヤのブロデギーに行き、姫に別れを申し上げしが、其日は姫の御両親なる公爵御夫婦には一家中の貴女紳士を從へ、公園に出獵ましませしが、姫は只獨り書室にありて、ギリシヤの「ピードンプラントニス」と申す書を讀ミ給ひて居たりしが、讀方の巧なることは紳士が「ボーケース」の中の面白き話を讀むに同じかりき。かくて訪問の禮も濟み、四方山の談の序に、姫には如何なれば今日公園にて、御獵の娯みを取らせられざるにや、と申したれば姫は嫣然として余に語れるやう、公園の娯樂は此の書の中の樂に較れば、只幻影とのみ思はる、嗚呼衆人は眞正の樂みの如何な

るものなるがを悟らざることよ、といひ給へり。そもかゝる高尚の御樂さは女子など中々得難き事なて男子にても僅に達し得べきものなるを、姫には如何にしてかく深く渡らせ給ひしにや、と申したるに、姫の申さるゝ、其譯を今御身に語らん、恐らく御身が之を聽かば驚き給ふべし、抑上帝が此身に嚴しき兩親と深切なる教師とを授け給ひしはいと有難き事にて、兩親の御前に在りては語るも默するも起居進退より縫緘遊藝踏舞に至るまで、其外何くれとなく樂しみにまれ、悲しみなまれ一々仰せに從ひ爲さゞる可らず、もし些にても違ふときは、嚴しき御叱りを蒙るのみならず、折々は手荒き御責に遇ふ事度々あれども、御兩親の面目に拘はる御事なれば、推て申し侍らぬことこそ、されば親愛深き教師エレメル君の許に行くまでは、此身は地獄の中にあるやうに苦しう覺ゆれども、もし師の許に在る間は、萬事を忘れて只物學ぶ事のほか餘念なきも、もし呼び戻さるゝ時は、毎に泣き倒るゝ、など悲しく覺ゆ、凡べて妾には何事よりも讀書は樂さにて、其餘の事は只此身に煩はしく難儀に思ふといひ給へり。

姫はエドワード第六世と御同年にして、御教育をも倶にせられしが、エドワード皇子は、篤實なる御若君にましませども、學業の御進歩は姫より劣り給ひけり。惟其頃英國に傳はりし新教をば、倶に深く御信仰遊ばせられたり。

一千五百五十三年御弱年のエドワード王には、御不豫なりしかば人心は惟御跡續の事のみ苦慮せるに至れり。此王の姉君に渡らせらるゝ、マリーと申す姫君は、最も近き

御相續者なりしが、深く旧教に歸依し給ふにより、王は遂に首相ノルソムベルランド公の議に從ひ、王位の御豫定を變更し給へり。抑マリー幷にエリサベスの兩皇女は曾て國會にて、王位の御相續者となるべき權利なき御方なりとして布告させ給ひしを、御父王の御遺言にて、御相續者の列に加はり給ひしかども、猶國內を退去すべき一條の法令あり。スコツトランドのマリー皇女に對しては、旧教を奉じ給ふのみならず、外國に在しますにより、格別の御評議に及び給はず。かゝるわけなれば、ノルソムベルランド公には此二女皇を退け給ふ事の難からざるを知り、其年の五月公の第四子グヰルホルドタツドリー公の夫人ジヨン、グレー姫を以て王位を繼がしめん事を企て給へり。グヰルホルド公はノルソムベルランド公の一味の御方にて、王も崩御せばノルソムベルランド公は是によりて、長く首相となるべき事は知られたり。

此の威權盛んにして、不正の政事家ノルソムベルランド公の大望も、初の程は事全く成就したるやうに見えたり。かくて重き病に臥し給へるエドワード王は、自ら深く新教を奉じ給ふにより、御姉妹の兩皇女が舊教に歸依し給ふを恐れ、國內を退去せしめ給ひ、ジヨン、グレー姫を以て御相續者と爲し給ふべき旨を御遺言遊はし、遂に其年七月六日に崩御し給へり。かくてノルソムベルランド公には其月の九日に、他の貴族を伴ひ、姫の住み給へるシヲン、ハウスに到り、姫を跪きて女王と爲し給へり。姫は今年御歳十七に滿たざる妙齡にましませば、女王となる御事などは中々存じも寄らざるこ

とまて、今此の仰せを聽き給ひて、痛く歎き恐れ、思はず前に跪ける貴族の膝下に俯し倒れ、御舅なるノルソムベルランド公に向ひ、兩眼に御涙を浮べて申すやう、何卒住馴れし此別莊に永く留まらしめ給へ、と一向に願ひ參らせしが、ノルソムベルランド公とダツトリー公とは、かゝる大望を遂げんとする欲念熾なるがうへに、此の兩家には常より姫を深く愛しみ養ひ參らせらるゝにより、今より女王として傅き奉るとも、別に憚る所なきにより、姫が樣々に理を陳べて辭み給ひしも、遂に聞入れ給はざりしかバ、姫は力なく其議に從ひ、御一族を伴ひて、トウエルの宮に赴き給ふぞ哀れなる。

かくて姫が今より女王となり給ふに付き、強みとなるべき事は、舅君ノルソムベルランド公が政府にて位高く、御威權も亦熾んにして、兼て一軍の指揮官にて在します事と、姫は新教を信じ給ふ事と、前王エドワードの御遺言を奉じたる事どもなり。又弱みとなる所は、國人一体に順當の御世續を奉ぜべしと申す事と、ノルソムベルラント公の不人望なる事と、舊教の徒はマリー皇女に歸服したるも、新教の徒は却りてノルソムベルランド公の誠實ならざる事より、自ら姫を疎んじ參らせざる事どもありき。

（未完）

○女優ハーヴエルランズ孃の腕

咽烟山人

ハーヴエルランズ孃の右の腕は、實に歷史に關係ある者と云ふべし。孃の右腕は二ーデルワルドに建てる獨乙人民の名譽なる壯大なる紀念碑、ゲルマニア紀念碑と永く

無窮に朽ちざる者なり。此紀念碑の建造者なる、在ドレスデンの博士シルリング氏は、久しく帝冠ヲ捧げ上ぐべき腕の雛形を採したれども、嘗て氏の心に留まれるものなかりし。無數の貴婦人は既に博士シルリング氏の面前にて、其美なる纎腕を露出したりしなり。然れども此大彫刻家は、常に首を振りて止まず、如何となれば無數の貴婦人の美腕も、此人の氣に入らざればなり。氏はドレスデンの婦人社會に一も氣に入れる腕のなきを嘆息なし不快に堪へざりしに、一夕鬱を散ぜんとて、大戯場へ見物に出かけたり。此戯場に彼の女優ハーヴヱルランズ嬢は丁度トウス子ルダト呼べる美人を演し居るたりしなり。博士シルリング氏は眼を凝して舞臺を見つめ居る内、恰もよし、ハーヴヱルランズのトウス子ルダ嬢が、女手を高く捧げて演舞せるを見るや「コレダ」と叫ぶや否や「躍て舞臺に飛上りたり。斯くて幕も終りたる時に、座元は女優ハーヴ井ルランズ嬢に、シルリング氏が獨乙國帝冠を捧ぐべきゲルマンア紀念碑の爲めに、久しく腕の雛形を求めたるが、今日御身の腕を見て、漸く見當てたる由云々と告げゝるに、嬢は快くシルリング氏の爲めに雛形となるべき由を承諾せり。之に由りて ゲルマニアの紀念碑も出來上り、巍然として今尚 ニーデルワルドにたてりと云ふ。

餘興

咽烟山人

へらず口　親父、「コレ半藏、朝早く起きニヤいかんよ、朝起きすれば三文の徳をするといふはサ、コレ見ろおれは今朝早く

から出て途中で五圓入りの紙入を拾ッたよ、」息子寐るから、「ヘー、ジヤー、おとッさん、紙入を遺失した人は貴父よりモット早く起きたんてしようね、」

○数学家　おりんと云へる子、初めて入校せり、受持ちの女教師は此幼女に算術の原理を教んと力を盡くし、二に二を乘すれば幾何、三に五を加ふれば幾何など、ねんごろに教へたる後、女教師はおりんに数字を一より十迄数へよと命じたるに、おりんはよどみなく見事に答へたり、其時教師は おりんに向ひ、今度は其を後の方より数へらるゝやと問へば、おりんは容易き事なりと云ひながら、教師の方に己れの背面を向け聲張りあげて、一二三、、、、、、、ト答へ上げたり

○黒人の鼻血　腕白者の勘太郎、買立ての帳面より自分の顔まで墨汁だらけに汚し、学校より歸り來れるを、おやぢは見て毎度の事故叱り懲さんとせしに、勘太郎は父に向ひ、「爺、今度は私が悪いんぢやないよ、アノ私の側に黒人の子が居るの、其子が今日鼻血を出したノヨ」、

○氣のきいたお三　細君、「アノ一寸おてつ砂糖を買ッて來てお呉れ」、てつ「ハイかしこまりました（と出て行きしが稍くして歸り來りて）、てつ「奥様、アノお次手に御塩も取て參りました」、細君「オヤさうかい、夫はよかッた、ソシテ砂糖は、、、、、、、てつ「砂糖ですよ、オヤ、どう致しませう、私は忘れて居りました」、

○怜悧な子供　小太郎（麵包を食ながら）おかさツんモ一つお呉れか」、母「小太郎、おまへ何故それを聞くの」、小太郎「アノ子、くれないなら之を靜かに食るのよ」、

○考物　此度は記事多につきお預りにいたします。



○立太子式の御模樣

天長節の朝、勅使德大寺侍從長、花御所に向ひ、嘉仁親王殿下に面謁して、皇太子冊立の勅諚を言上す。殿下御宣下を受けさせられ、陸軍歩兵少尉の御正服を召させたまひ、御參內の上、鳳凰の間に於いて御對面あり。陛下親しく菊花大綬章を執らせられ、之を殿下に授け給ふ。次に殿下を近衛歩兵第一聯隊附に補し、壺切の御劍を傳進あらせらる。右畢りて殿下御退出、賢所に御參拜あり、軈て花御所に還啓あそばされしと承る。當日は學習院を始め、官公私立幾多の學校に於いては、音樂唱歌其の他の準備を以て、君が代を頌せざるはなく、又宮城正門外にて、殿下を奉迎し、万歳を祝し奉りしは、帝國大學々生、高等商業學校、高等中學校、東京美術學校、高等師範學校、同附屬小學校、東京職工學校等の生徒三千餘名ありしと云ふ。此の八表に溢るゝばかりの萬歳萬々歳の祝聲の中に、皇太子に御冊立あらせられたる活潑英武に渡らせたまふ明宮嘉仁親王殿下は、以く後益々學を勵み德を磨かせられ、他日我が大日本帝國の英主として、國民の瞻仰する所となり、國威を海外に耀かしたまふの準備あらせらるべきは、吾人の謹んで信じ奉る所なり。

○奉賀東宮冊立詩歌

去る三日の佳節に於いて、奉賀東宮冊立詩歌として聞こえたるもの多かる中、左に其の傑作と思しきもの二三を録す。

明治廿二年天長節、詔立明宮親王殿下、爲皇太子、大禮慶成、猗與盛哉、恭賦七言古體一篇、歡抃之情見乎詞。　槐南　森大來

今皇聖壽辰維良、元儲承レ序居ニ春坊一、羽翼鴻飛絶ニ四海一、旌幢日出懸ニ重光一、龍樓煌爚紫煙繞、鳳輿迤邐華蓋張、天門徐引彩鸞扇、御氣遥通金鴨香、羽林虎騎正儼立、瀛池鵷序俱趨蹌、太子知爲ニ天下本一、臣民盡舉万年觴。青山鐃吹競ニ笳鼓一、翠華眷臨親閲レ武、禁營練甲排ニ魚龍一、行殿晴雷繞ニ梁柱一、車聲疾轉馳道雲、馬蹄欻散灑塵雨、

屆蹕首數新臺司、調羹役用舊匡輔、其餘煙閣房杜倫、敢即漢廷絳灌伍、勳庸赫々衆所膽、東朝濟々況無數。歸來賜宴明光宮、玻璃圓闕淑景融、芙蓉矗峙八極表、蓬萊秀聳三山中、千官拜壽聖顏近、万衆呈喜群生同、憶昨國憲始頒布、更將家範垂無窮、而令宸極有副貳、當時翊贊賴鉅公、紫芝豈可避世去、赤松願樹非常功。是日迨昏魚鑰啓、雲和琴調奏軒陛、玉牒已授元良箴、蘭臺爭擬柏梁體、明星出地臨紅墻、樺燭燒天接朱邸、七貴三公拚舞歸、八珍六味飽飫饜、天街士女包如荼、杜陵臣甫喜流涕、野無遺賢海不波、菊有黃華泛以醴、一醉作賦嗟疏才、遭逢眠覩三大禮。（天寶中杜子美獻三大禮賦、爲玄宗所知、予謂皇城移轉、憲法發布併此盛典、亦稱三大禮、結故及。）

奉祝立太子古調今調二首歌　福羽美静

天さかるひなもみやこも、
たしなべて祝へることの、
よのなかにおほかる中に、
たぬときは々ふのほきこと、
うれしきはけふの御祝ひ、
すべらぎのさかゆく御代よ、
わが御子の御位さだめ、
さだめます君が心よ、
さだまれる君が御うへよ、
いかさまにうれしかるらむ、
いかさまよとふとかるらむ、
わが國はむかしも今も、
神代よりうけつたへます、
すできおき君が御國よ、
さるからよとふとき國よ、
ます〳〵ふくわのみいつを、
よそ迄もうちかゞやかし、
よそびともそのとふとさを、
まつふさよしりて仰ぎて、
そのうへによろづの事の、
その國よあらむかぎりは、
とりまして榮えませよと、
誰も皆祝へる御よに、
さだめます日繼の御子の、
尊さを千代とことほぎ、
うれしさを千代と唄ひて、
もろびとのあふぎたのしむ、
けふよもあるかな　（右古調）

皇太子冊立　高崎正風

さだまりませる若みこの、
その御位の千代八千代、
つるとかめとによそへつゝ、
世の中こぞりて仰ぎけり。　（古今調）

御垣のうちにもえいでゝ、
まなびの場におひたちて、
雛のみやまのかけしめん、
またれし秋の時をえて、
匂へる花のした露に、
よもの民草うるほはん、
色こそみゆれ千代かけて。

合唱、

皇太子はちよませやちよませ、
皇太子はちよませやちよませ。

○楠正成

宮城正門外の銅像装置に就き、博物館總長九鬼隆一氏より　普く圖案懸賞の募集をなされたるは、曩に本誌に於いても記載したる處なるが、這回川端玉章、岡倉秋水二氏の立案にかゝる、楠正成戎装馬上の圖に決定せられたりといふ。嗚呼忠臣之墓已に人臣たるものをして欽仰堪えざらしむ、今又辱くも宮城の正門外に装置せらるゝを得、楠公亦遺憾なかるべし。魂魄若し靈あらば、願くは堅く宮城を護し奉れ――申すまでもなけれども。

○歌御會始御題

来二十三年一月の歌御會始は、寄國祝と仰せ出だされ、其の詠進期限は、一月十日迄と定められたる由。

○釋典の古式

舊幕時代昌平黌の盛んなりし頃には、聖堂釋典の禮も年々欠くことなかりしが、洋學一たび勢力を得しより、以来、今は僅に帝國博物館の飾棚に於いて、釋典の器物を觀得るのみ。聞く所に依れば、這度文科大學其の他有志の人々には、深く茲に慨する所あり、来年より釋典の古式を再興せんと協議中なる由。美擧といはざるべからず。

○國文學振興會議

國文學の振興を計り、斯學教授法の一定を圖らんが爲、久米幹文、上田萬年其の他諸氏の發起にて、去月廿七日府下諸學校各專門の教師諸氏は、皇典講究所に會し協議を　る所ありたり。

○國文學興る

矢張流行の風に吹き廻されたるにもあらざるべけれども、近頃國文學に關する研究所、集會等の陸續として現れ出づるは奇といふべし。吾人は國家の爲に之を喜ぶ、又天麩羅文學者の巡避せざるを得ざるに至るべきを賀す。

○日本畫また興らんとす

日本てふ冠詞あるもの、近頃頻りに勃興するは目出度き事なり。西洋畫其の威を逞ふ

するに當り、又日本畫を說くものあらざりしが、今や學校教育上に於いても、西洋畫日本畫孰れか優るか、とは一大問題となれり。東京唱歌學校にては、這回摸規を擴張し、生徒の餘課を以て日本畫を無修せしむるといふが、是亦美擧！

○憫むべきは

女教師なり、女教師は小學高等科の男生を教授し得ざる事となれり。嗚呼我日本婦人は、其の徳古人に及ばざるか、其の特性は俊傑の種子を煦育するに足らざるか。

○面白き離婚

面白き離婚もあればあるものなり、大坂「新社會燈」の編輯人植松氏は、左の如き離縁狀にて其の妻君を離別せりといふ。

離縁狀の事

一 其許殿と三ヶ年前結婚致し候處、其許殿實父今回新條約斷行說を唱道致し被居候に付、我等と主義を異にし、親族睦まじからず、家風に適せず候間、今度離縁致し候、然る上は將來何如なる異主義の者へ縁付き被成候共、我等に於ては一切申分無之候、仍而離縁狀如件

植松伴吉

大谷しげ殿

吾人は其の妻君の爲に寃を訴へざるを得ず。

○正理公道とは如何

加藤文學博士は、學士會院にて「兎角物事は潔白なる道理のみにては成就せぬものなり」といふ奇なる論題にて、奇なる演說をなされたり。其の中「若し吾々人類が昔より正理公道のみを遵奉したらんには、決して今日の開化を見得ざりしならん」との一言は最も奇なりといはざるべからず。氏の所謂正理公道とは如何なるものぞ。

○近頃豪毅なる三婦人

豪毅なる北堂——大隈伯の北堂は、八十七歲雄壯なる言もて自身の油畫を斷りたり。豪毅なる夫人——大隈伯の夫人は、猶豫なく其の夫の截斷術を施すべきに斷答せり。豪毅なる細君——盈進社の壯士に暴行を加へられたる金澤市會議員、近八郎右衛門氏の細君は、盈進社長遠藤秀景氏に向ツて、非常の雄辯を以て、非常の手強き談判を申し込みたり、種々の申譯は一切聞き入れず。

寄書

懸賞募集天長節の歌　第二

既に前號に報告したるが如く這回本社の懸賞和歌に賞を得たるは渡邊欲而(一等賞)勝田孝之(二等賞)佐々木昌綱(三等賞)山際松子(四等賞)の諸氏なりき其の他尚秀逸と覺しきものを左に掲げん

うれしみや大内山にうたげせんわれも御民のひとりとおもへば　芝山豊子

天津日の光とゝもに日の本のひつぎたえせぬ今日のみまつり　三宅眞壽保

白菊の千代をはるかの雲の上にふりさけみつゝ祝ふけふかな　伊地知耕作

千早振神代ながらの菊の花けふ九重に咲きにけるかも　藤崎亞之助

天の下なびくみくさの一もとに御代をことほぐ今日にもあるかな　宇野信次郎

大君の千歳の秋をいはひてんさかりの菊の花をかざして　石原和一

咲きにほふ菊をかざして大君の千代のよはひをいはふ今日哉　岡田八重子

曇りなきめぐみをおもふ大君のみよながつきの月をながめて　樋口靜子

大君のあれましゝ日を祝ひつゝ酒くみかはし我酔ひにけり　片岡光雄

やどごとにさかみつぎして大君のあれましゝ日を祝ふなる哉　井上ほき子

大君のあれましゝ日を祝ふなる宿てふ宿にさかみつぎして　湯原島子

宿毎にみはたかゝげて大君の千歳をいはふ今日にもある哉　橘糸重子

かしこしな天照します日のみこの光みそめし今日とおもへば　戸谷文平

天つ日の御旗かゝげてあれましゝ君が御影をあふぐ今日哉　村上りん子

あきつかみ世にあれましゝ生日とて千歳のみかげ仰がるゝ哉　渡邊欲而

朝日子の光にまさる白菊のはなのゑまひをみるぞうれしき　伊地知耕作

賑はしく鄙も都もいはふなる現津御神のあれし今日とて　渡邊雪子

日のみこの世にあれまして萬代も生日足日と祝ふ今日哉　野田和作

かしこくもみこの命のしろしめす生日足日は今日にてあるらし　大沼廣吉

小泉里成

天津日嗣は長々し今日の節會は山里も明治の御代を壽きて御旗の竿ぞ太々し

始國知らし、大御代や都もあまたかはれとも變はらぬ君が宮の名を千代田てふこそたふとけれ　高須平六郎

日野清三郎

天津日影ものどかなり　國津御風も靜かなり
きみが八千代の末長く　おさまる御代ぞたのしけれ

仝

四方の國はらおしなへて　おほみしるしに打なびき
君が八千代に萬代に　ひらけゆくこそめでたけれ

仝

萬の神のましませは　千代に八千代に君か代を
かきりなきかをおろかにも　祈るけふこそかしこけれ

仝

大宮人も山人も　はらをつゝみにうちまとゐ
わか大君の萬代を　いはふさまこそうれしけれ

幸崎　政治郎

東のうみに雲高く、のぼるあさひにひらけゆく、世は幾千代も菊の
香の、榮を祝ふ、数多たみくさ。

神にいませる　おほきみの　深きめくみに
うるほへは　み代久しかれ　長かれと
千代に八千代と　願ふなり

淡城　木村レゲ子

淡城　鈴木日出子

あかねさす日の　大み旗　四方になひきて
民草の　あれましゝ日を　今日そよと
われをもわすれ　祝ふなり

同令孫　松本俊平

伊登毛尊伎大君乃阿禮万世志日和計布奈州曽舞夜歌屋毛呂共邇歌
屋舞夜諸共爾

令孫　土屋廣丸

濱のまさこにあしたつのあそへるあとを千年てふ文字によミそへ
君か代をつきぬためしとことほゝむ

仝

色かはりせぬ山松にそよふく風は大君の御世をときはにゝてほき
てうたひ出つる聲ときく

仝

心一つの誠より千々に光れること玉はよみもつくせぬ大君の御世
のためしといはふなり

天長節

土屋廣丸

やすみしゝ吾大君はあきつ神あら人神と神なから神習ひくるあら
は世のこととりたまひうつし世を治めたまひてうらうらと豐さか
登る朝日かけ匂ふか如くミかた見を持いつきまを威稜くもらぬ
如くミつるきのひかりさやけくやさかにのさかえましつゝ大御代
はいやとことはにさゝれ石のいはとなるまてつむちりの山となる
まて其いはにあそはむ鶴もそのやまに年經む松もよろつ代をとも
にちきりてことほきまつれ

反歌

あふけたゝ豐榮登る日のみ旗四方爾普く高きみいつを

淡城　鈴木日出子

茜さす、日のミことも、やをミしゝ、我大きみか、赤馬の、武藏の原
に、宮柱、ふとしく建てゝ、百敷の、大宮人を、打つとひ、うつりいま
して、とことはに、かきりも知らす、天か下、しらし賜ひて、民草を、
惠み給へは、久方の、雲の上より、天さかる、ひなの限りは、ひむか
しは、しむしゆのそかひ、西は猶、よなこくしまの、其きはミ、なほ
たくあまの、子等迄も、慕ひまつれは、今日はしも、あれましゝ日と
、御國旗、打も靡かし、手のまふも、足のふミども、知らま弓、引きつ
らねつゝ、呼ふ聲の、高かるかきり、祝ふなりけり

詠天長節歌并反歌

松浦辰男

限りなく　祝ひまつれと　大君の
惠みあまねく　宮人に　御酒を賜へは
宮人は　醉てゑらけり　今日の此
いく日にあへても　宮人の　歌にはあらぬ
もみち葉も　なひたる如し　村菊も

あみたる如し　草も木も　よりて仕へて
君か代を　よろこふさまは　色に見えつゝ
今日はとて　粧ふに似たり　もみぢ葉の　錦色ころも　菊の花
きぬ

天長節を祝ま奉る長歌幷短哥　　松本胤雄

くわしほこ。千足のくまと。をめかみの。あれませしくに。皇みまのうしはきたまふ。むましくふ。けふまてれ。たからたの。ちよたのみやに。たかみくら。たちこめたまふ。あきつかみ。わかすめらきのあれませし。あめなかく。つちひさしとふ。よきときの。いとうるはしき。よきむぞと。おふみやの。うちへ　むとこに。きらめきて。よそほひたてし。あさひかけ。みこをふきみも。まへつきみ。もものつかさの。ひとたちも。とつくにく。の。つかゐひと。各ともに。つれたちて。みはしのもとへ。ひさまつき。ほきてとを。まをし。たまへけれ。さねにや。つかさ〳〵に。ことおほ跡。おほみけと。まことよみきを。たまわれむ。もろひとわ。あかになす。みなゑひて。たなそこうちて。まひうたひ。よろこひあゐて。まかりちわ。きしるくるまの。をとひゝき。むちうつむまの。こゑたかく。千よ阿づの。いくさひとらが。かちときを。あくるがたさく。とよめきあいて。いひけらく。あなたぬしっけふの日かけゆ。あなうれし。けふれうたけ也。

かへしうた
うこきなき。みくにのふりや。とこにはに。ひかりさかえむ。けふのひかけに

日野清三郎

久方のあまつ日影は日々〳〵に長閑なれともとし〳〵のけふはことさら朝雲の限りもみへぬ大空にのほる光りのいやましに名にしおひぬる日の丸のおほみたる君か代のちよのみかげをさしそひて玉の臺も柴の戸ものきはに高くてりわたる也たけき御代をふしておかみ仰きて祝はんあふきていはゝんとし〳〵のけふの祝ひのたとほきを
かきりなき代の初とやせむ

詠天長節歌　　朝風

やすみしゝ我天皇のかしこくも御生たまひし今日斗たふときはなし諸共に天をいたゝきもろともに地にすめろふ國民のほくはむへき島といふ島のされ〳〵國といふ國のと〳〵まつろへるあかきたゝろは軒並に立しみえたにあらはれにけり

仝

かけまくにあやにかしこき大君のみあれ給ひし今日ふも目かな
軒並に立し御旗は國民の今日をいはへるまるしなりけり

岩井俊三

今日は是れ
即ち我々人民が
叡聖文武の大君の
在りし其日の祭ぞや
壽き祝ひ奉れ
今日は是れ
我が日の本を知しめす
在りし其日の祭なり
明治の御代の長きをむ

十一月の三日にて
國父と尊み奉る
御降誕
祝へよ祝へ我君を
十一月の三日にて
天皇陛下の御降誕
祝へよ祝へ諸共に
壽き祝ひ奉れ

(1)

天長節(題)　　安達巌三郎

日(ヒ)ノ出(デ)ノ國(クニ)ハ安(ヤス)ラケク、
君(キミ)ガ惠(メグミ)ニ浴(ユアミ)レツ、
千門萬戸(センモンバンコ)日章(ニッシヤウ)ノ、
都(ミヤコ)モ鄙(ヒナ)モヲレナヘテ、
天長節(テンチヤウセツ)テフ今日(ケフ)ノ日(ヒ)ハ、
旗(ハタ)ヲ軒端(ノキバ)ニヒルカヘレ、

(2)
君ガ千歳ヲ祝ヒケル、　君ガ千歳ヲ歌ヒケル、
開ケ渡リシ日ノ本ノ、　芽出度御世ハ大君ノ、
生レ賜ヒシ昔ヨリ、　キザセシモノトハ知レケル、

(3)
祝ヘヤ祝ヘ國人ヨ、　明治ノ御代ノ大君ハ、
千歳ヲコメテ今日ノ日ニ、　生レ賜ヒシ壽ブカレ、

(4)
アヽ歡ハシ歡ハシ、　天長節テフ今日ハ、
我國人ノ第一ニ、　祝ヒ壽ク日ニゾアル、

(1)
日ノ本ヤ、光アマ子ク、山里モ、
　　君ガ生ニシ日ヲ祝ヒケル

(2)
千代ノ聲 都モヒナモ滿チ〳〵テ、
　　今日 九重ノ君ヲ祝ヒツ、

潔

歌へや舞へやいさ共に　時も明治の丑年の
霜月三日の其日なを　大八洲の諸人か
皇御國を治めしる　天津日嗣の大君の
千代萬歳を祝ひつゝ　大勲功を歌ふ日ぞ
猛きれ猛き武士は　喇叭の聲と諸共に
勇み祝ひて天皇の　君か八千代を歌ふなり
畝傍の山の高峯には　千代經る昔の白雪は
昇る朝日と諸共に　きら〳〵と輝けり
賤か籬根の撫子も　荒野に咲ける雛罌粟も

互に晴着を飾りつゝ　皆ゐて顔に咲けけり
學びの家の生徒は　聲高かに歌ふなり
都村里おしなべて　ともに樂しさ勝りけり
三千余萬の皇國人　歌へや舞へやいざ共に
酌めや酌めや諸人よ　醉へや醉へや明るまで
空に轟く祝砲の　響とともに仰ぎみは
奥ぞゆかしき靖國の　社に祭り納めにし
幾譽も高き幾千々の　古へ人の諸靈は
俠心を一節に　身は大君の爲めにとて
散れ果なく玉の緒の　屍を野邊に曝しけり
されて其名は千代までも　櫻と共に馥郁しゝ
尊き皇帝の皇國をは　守るは誰の職務そや
神の教へは銘肝して　勉めや君よ盡せ君
今日の祝ひと諸ともに　忠義の二字は忘れじに
我皇にもしや又　冦なを兇者ありもせは
國を愛をる丈夫の　いと勇壯しくふるまへて
獅子をも驚をも打挑ひ　高麗唐の端までも
打爽けて雄々しくも　御稜威を宇内に輝せ
我か皇にもしや又　冦なれ兇者ありもせは
國を愛する大丈夫か　いと勇壯しくふるまへて
獅子をも驚をも打挑へ　高麗もろこしの端までも
打爽けて雄々しくも　御稜威を宇内に輝せ

天長節　　石原和一

すめらきのあれましゝ今日のなかりせはこの大みよをいかにみましや

花の家栞

天津日の照らす限りの國人に今日をよき日と知らせまほしも

四の海唐土人もなひくらん仰くも高き天つ日のかけ　藤崎要之助

日の御子の天地てらす御ひかりを今日あふきてそ祝ふ民草　篠原久作

千代かけて千秋長秋きはみなく生日足日と祝はぬはなし　仝

天地と長く久しく日の御子の世にあれましゝ今日そめてたき　戸田忠綱

神さふるいつの男山の玉椿いくよへぬとも色はかはらし　藤原祇弘

君か代は海にも陸にもみちわたる煙とゝもにさかへ行らん　道木南天

あふ空に仰く月日はすめらきの治むる御世のさかえなるらん　樋口静子

呉竹にさへつる鳥も千代〳〵と祝ひまつろふ君かよはひを　仝

大君を千代にといのる眞心は天照神やしろしめすらむ　清水正次郎

門毎の小旗をみても大君の御代を千年といのらぬはなし　高須壬子良

いへとに國の御旗をおし立て君か八千代をよはふけふかな　衆松庸村

大君の恵みにぬるゝ天か下御代の長きを祝ふ諸人　友松冨佐代

千代八千代萬代かけて日の御子の光さかゆくけふそめてたき　戸田忠實

竹友

桐の葉に露と匂ふと菊の花今朝そみつほのさかへなるらん　中原芳世

君か代の恵の露のとこしへにかゝれとやいのる四方の民草　中村發水

君カ世ハ千代ニ八千代ニ長カレト四表ニ炫ク今日ノニキハヒ
スミワタル瑞穂ノ國モ榮ヘ行ク君カメクミソ芽出タカリケル　中島居士

天津日ニタクヘテ至ル大君ノ御影ソ照クコト國ノハテ
君カ世ハ千代万代ニ長カラン天カ下ニソ榮フトソ思フ　中山樂山

高砂ヤ尾上ノ松モ色添ヘテ我大君ヲ千代ニ八千代ニ
歳毎ニ榮ヘ増レ益ス大君ノ光リハ今日ノ御旗ニソレル　松本俊平

掛巻毛綾彌畏伎天皇能阿禮万世志日曽許布乃日影和　仝

臣乃美迦渚邇須求留千鳥万豆君賀御代於婆保伎呼布奈理　加藤正三郎

大君のめくみも深きしちつゆに打もなひかぬたみくさもなし　大島かう

豐かなる御代を祝ひて國たみのよろこひあふや今日そたのしき　高須平六郎

千代經てふ松も限あり限りなき君をは何に寄て祝はむ　いと子

明らけき御代の恵みに國民の千代よふ聲はひなも都も　三宅眞壽保

ためしなき天津日嗣の御まつりをいはへや〳〵四方の民草　仝

天津日の光りと〻もに日本のひつきたへせぬ今日のみまつり
加藤利四郎

秋つしま治めたまへる大君の御代もゆたかに民そやすけき
茂庭竹窓

動きなき御國の君は天地と共に榮えん萬代までも
ひさ子

白菊の花もゆたかに見ゆるかなきみの惠の深きものから
中村岩太郎

ゆたかなるけふをめでつる友垣は君か千とせを祝ふ白菊
田崎五百頴

軒のはにさゝくる旗のなひきあひて君かみあれをけふそことほく
大杉兵太郎

大君の御代ほきまつる家々のはたてになひく朝日かけかな
福島權兵衛

天津君しろしめす代の長なへ壽き祝ふ今日の節かな
中川朔治

大君の千世に八千世に天壤彌世久しく替らぬ榮へを
宇野信次郎

かきりなき御代にしあれは今はまた何によそへてことほきかせん
松下美才男

七重八重千代をこめたる民草や今日九重に花も咲くらむ
片崎增藏

御國生の常盤の松の年をへて枯るともつきし君か齡は
紙谷亦七

あまさかるひなの港の波風も靜なる代にすむぞうれしき
富永寬容

斯むかり惠も深かき大君のあれまし・日ときくもかしこし

日の御旗軒にかゝけて日のみこのひかり尊くあふくけふかな
鋤柄晃

皇の降りたまひし日にしあれは祝ひつくさん言の葉もなし
吉田曾四郎

君か代は千代に八千代に萬代を經て長かゝれと祈る民草
葛西左一郎

仝

君か代は限りなけれと祈るなる照る日の本の旗をかゝけて
上野賴雄

呉竹の節の間毎に千代懸けて眞直に延ひよ君か壽
屈嵯散人

明かに治まる御代ともろともに千代八千代まて君かよはひを

第一高等中學校教諭　久米幹文先生編輯

日本文粹

全三冊

一之巻　定價金二十五錢　郵税金二錢
二之巻　定價金二十五錢　郵税金二錢
三之巻　近刻

我國は神代より皇統連綿として東洋に獨立せる帝國なれば風俗言語など特別にして文章は尤他國の文に似ず一種の精神光彩ありて漢文洋文の及ふべきにあらねどもこれを知る人まれにして文集といふべきものも少く偶ゝ軌範めくものあれども長き文を切ぬきたるものなれば首尾の脈應なく殊に玉石入交りてみるに足るものなし こゝに久米大人この書を編輯してこの文の中興といはるゝ契沖阿闍梨加茂翁を始として今の名ある先生家の名文をもあつめて其粹をぬきたれは法則の正しきのみか精神光彩脈應波瀾具りくまことに昭代の文と申へし今より我國の文章を學はんとする人これをおきて何にかは法を取らんとする三巻の内一巻二巻は既に刻成り三巻も近々刻成るべけれは試に御購覧あらまほしく候也

東洋學會々員ニハ特別割引ス

修史局編輯長 重野安繹先生序
文科大學教師 チヤンバレン先生序
文學博士 小中村清矩先生著

歌舞音樂略史

長谷昙春 畫
川邊花陵補畫

和装美本 全二冊 紙數二百二十枚古圖十六葉入

正價金六十五錢 郵税金二錢

書中目次●上古より歌舞音樂の事業有し事●外邦より歌舞音樂を傳へし事●大寶以來内外の樂を朝廷に用ゐられし事●唐土高麗より傳來の樂並に我國新制の樂の事●神樂催馬樂東遊風俗樂の事●朗詠今様雜藝の事●瞽者の平家を語る事●散樂又猿樂の事●田樂幷に田樂の能の事●猿樂の事幷に狂言の事●白拍子其他の舞の事●歌舞伎狂言幷に俳優の事●淨瑠璃節等に操人形の事●三味線幷に箏琴の事●小唄長唄等の事●歌舞音樂沿革論

落合直澄先生著

日本古代文字考

圖畫挿入大形本 全二冊極美本
定價金七十錢 郵税金四錢

本書ハ落合先生多年ノ刻苦ニ成リシモノニテ我國古代文字ニ関係アルカギリヲ考證セラレ一々實物ニ徴シ實地ニ臨ミ深ク討究セラレタル者ナレハ其證據ノ該博ニシテ且ツ確實ナル眞ニ人トシテ驚カシムルモノアリ世ノ文學ニ志アル者ハ必ス一讀スヘキ良書ナリ

大澤清臣先生校輯幷註

皇朝紀事文栞

木版美製本 全三冊

定價金七十八錢 郵税金二錢

本書は先生みつから緒言例言に述べられたる如く國文を書き習はん諸君の爲に多年校合せられたる假字文の書十部の中より記事体の摸範となるべきものなり三十條を選抄し誤脱を訂正し注釋を加へられたるものなり今本書を披閲するに文辭の微妙なるは琴瑟の佳調を聞くが如く註釋の明瞭なるは鏡面の照影を見るが如くにして精細懇篤至れり盡くせり諸君果して能く本書を執りて熟讀翫味せむ當に國文を綴り語法を知るもをのづから自由なるよ至らんこと必せり我書を講くこと年久しきも未たかのごとき完全の文栞あるを見す實に國文教科書の冠たるものなり

黒川眞頼大人閲 小原燕子著幷書

消息文範

全二冊
正價金四拾錢
郵税金二錢

右ハ婦女作文ノ爲年中要用ノ消息ヲ十二ケ月ニ分チテ倭言美巧ノ文書ナリ頭ニ古語ヲ引テ註譯ヲ加ヘ文章ノ句誤格合等ヲ述ヘタルヿ信切叮嚀ナリ

發行所 吉川半七
東京市京橋區南傳馬町一丁目十二番地

十月廿五日

眞理

發兌

本誌ハ宗派及政黨ノ外ニ挺然獨歩シ專ラ道德宗教ニ係ル眞理ヲ講究シ其時論ヲ痛議スルヲ本領トシ又兼デ政治教育哲學美術ノ問題ニモ渉リ公平不偏ノ觀察ヲ下シ內外大家ノ論說ヲ蒐集シテ參考ニ供シ批評ニ備ヘ又特ニ我國男女青年ノ德育ニ就テハ最モ意ヲ留メ力ヲ盡シテ其指針タリ良友タランコヲ期スルモノナリ

第一號目錄

毎月一回廿五日發行●一冊金八錢●全國無逓送料廣告料一行(廿四字詰)ニ付金七錢(一行數回數ニヨリ割引アリ)

發行所　世光社

東京市駿河臺鈴木町十一番地

學資ある者に告く

高等學校入學試驗學科

豫修誌

學資なき者に告く

毎月二回　一部十五錢郵税壹錢半ヶ年分一圓六十二錢

●專門學士ノ諸學科講義錄及ヒ諸學校試驗問題答案ヲ掲ケタル未曾有ノ好雜誌ナリ(百ペーレ)入學又ハ登用試驗ヲ望ムモノハ此誌ニ由テ倍勞ノ功ヲ收ムル容易ノミ

●學資ナキ者ニハ特ニ無代價無郵税ニテ當誌ヲ送リ又ハ學資ヲ得セシムル便法ヲ設ク本誌ニ就キ見ルヘシ

●日々新聞評類甚多キモ此書ノ右ニ出ルモノナシ

東京市神田南乘物町

吉岡書籍店

靜陵學會雜誌第五十五號目錄

本會ハ學術ノ上進ヲ謀ルヲ以テ目的トスルモノニシテ毎月一回（定時）雜誌ヲ發兌シ會員ノ論説ヲ登載スルモノナリ會費一ヶ月五錢（郵税共）前納スルモノハ入會ヲ諾ス

靜岡縣靜岡市材木町五十二番地
發行所 靜陵學會

○高等女學校尋常師範學校等家事育兒科教科書
○醫科大學第一醫院産科婦人科小兒科病室用書
○文章は談話躰の平假名文石版木版畫入日本綴美本
○婦人方への贈物よりは此書に勝る好物なし

文部大臣海軍中將從二位勲一等子爵榎本武揚公 題字

帝國大學産科學婦人科學教授醫學士濱田玄達先生
醫科大學小兒科學講師醫學士弘田長先生 校閲

醫學士三島通良先生編述

—親の巻 婦人懐妊出産より七夜中養生法 定價金三拾錢
—子の巻 小兒分娩より學齡兒となる迄の養育法教育法 定價金四拾五錢
皆郵税共

はゝのつとめ

本書は出版以来諸君子幷に各大新聞雜誌より非常の好評を得一ヶ月ならずして六百余部を賣つくし候位なれは今更其の完全無比なる事は申迄もなく特に今般は又た

恐れ多くも榎本文部大臣の御傳獻を以て

皇后陛下の御手許へ獻上相濟み此の前代未聞の榮を蒙り著者の面目此上もなくとこそ思はれ候されは世に人身衛生の根源たる母子衛生法を理解せられんとする貴婦人君子は必ず一部を購ひて國家を利し己を益し給へと云爾

發兌書肆
日本橋通三丁目 丸善商社書店
全 通塩町 中央堂書店
本郷春木町 島利支店
全馬喰町二丁目 英蘭堂島利

（逓信省認可）
明治二十二年十一月二十日印刷出版